

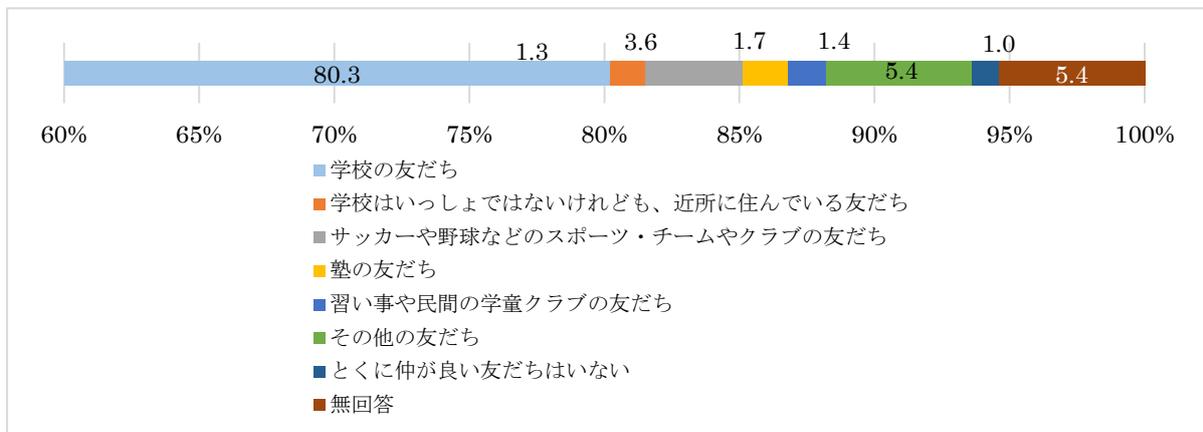
第6章 子どもの人間関係と居場所

1. 子どもの人間関係

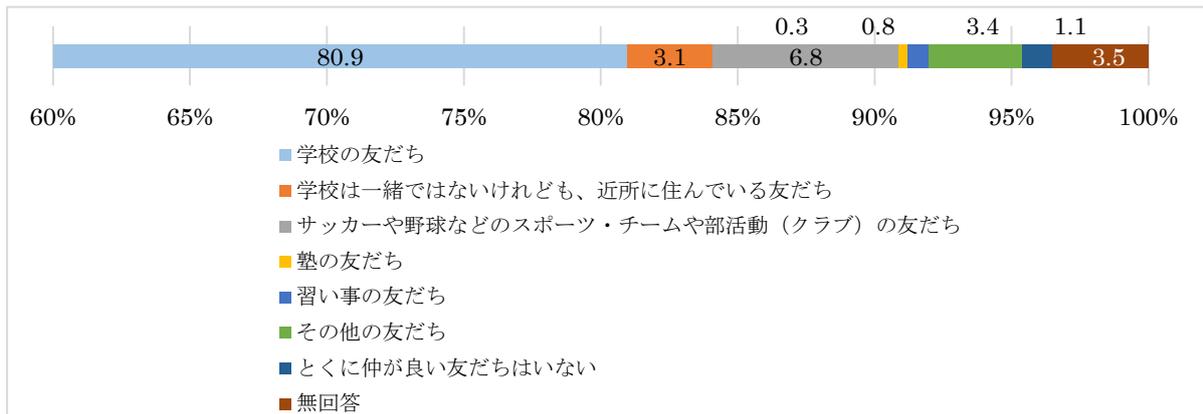
(1) 友人関係

子ども本人に、一番仲が良い友だちを聞いたところ、両学年とも約8割が「学校の友だち」と答えている。他には、小学5年生では「その他の友だち」が5.4%、中学2年生では「サッカーや野球などのスポーツチームや部活動（クラブ）の友だち」が6.8%をしめた。子どもたちにとって学校は友人関係を形成するうえで重要な場所だと考えられる。一方で、「とくに仲の良い友だちはいない」と答えた子どもも1%ほど存在している。

図表 6-1-1 一番仲の良い友だち(小学5年生)



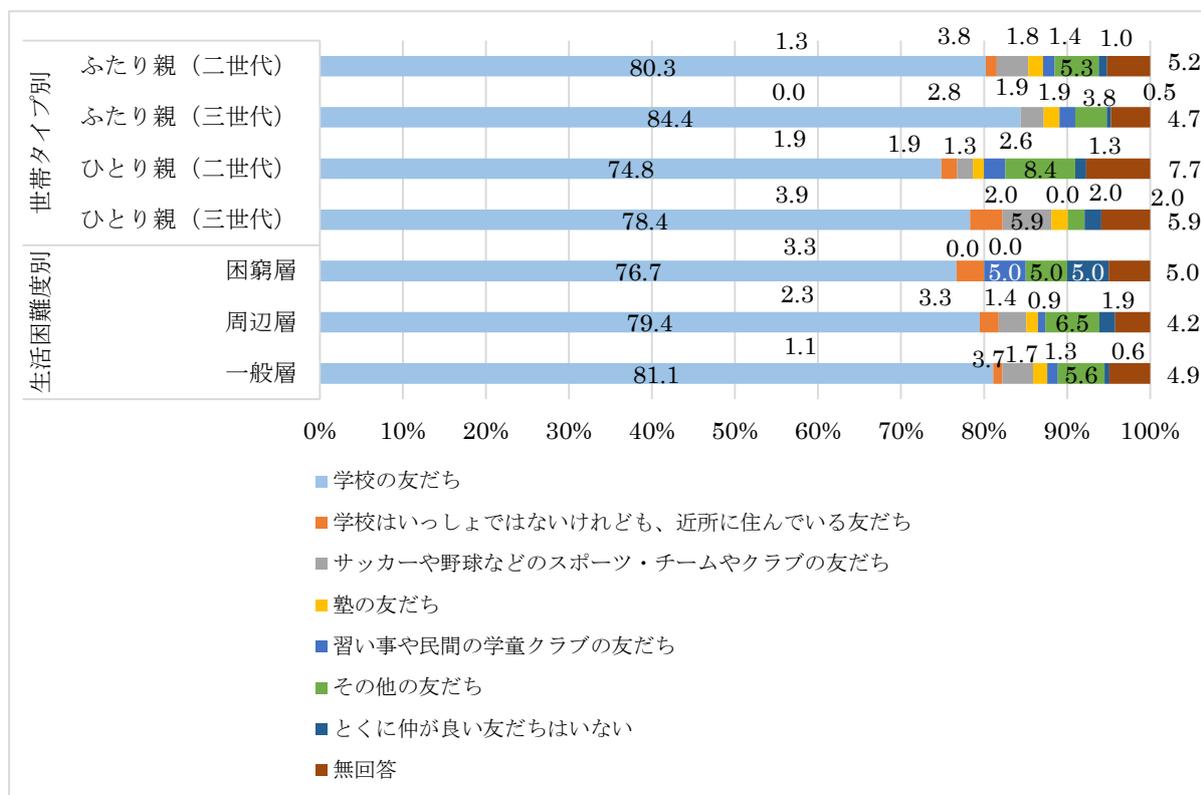
図表 6-1-2 一番仲の良い友だち(中学2年生)



小学5年生の「一番仲の良い友だち」を、世帯タイプ別に見ると、統計的に有意な差は見られなかった。しかし、生活困難度別に見ると、統計的に有意な差が見られ、いずれの層でも「学校の友だち」が最も高い点は変わらないが、一般層では「特に仲の良い友だちはいない」が0.6%なのに対し、周辺層で1.9%、困窮層で5.0%と生活困難度が高いほど友人がいない子どもの割合が

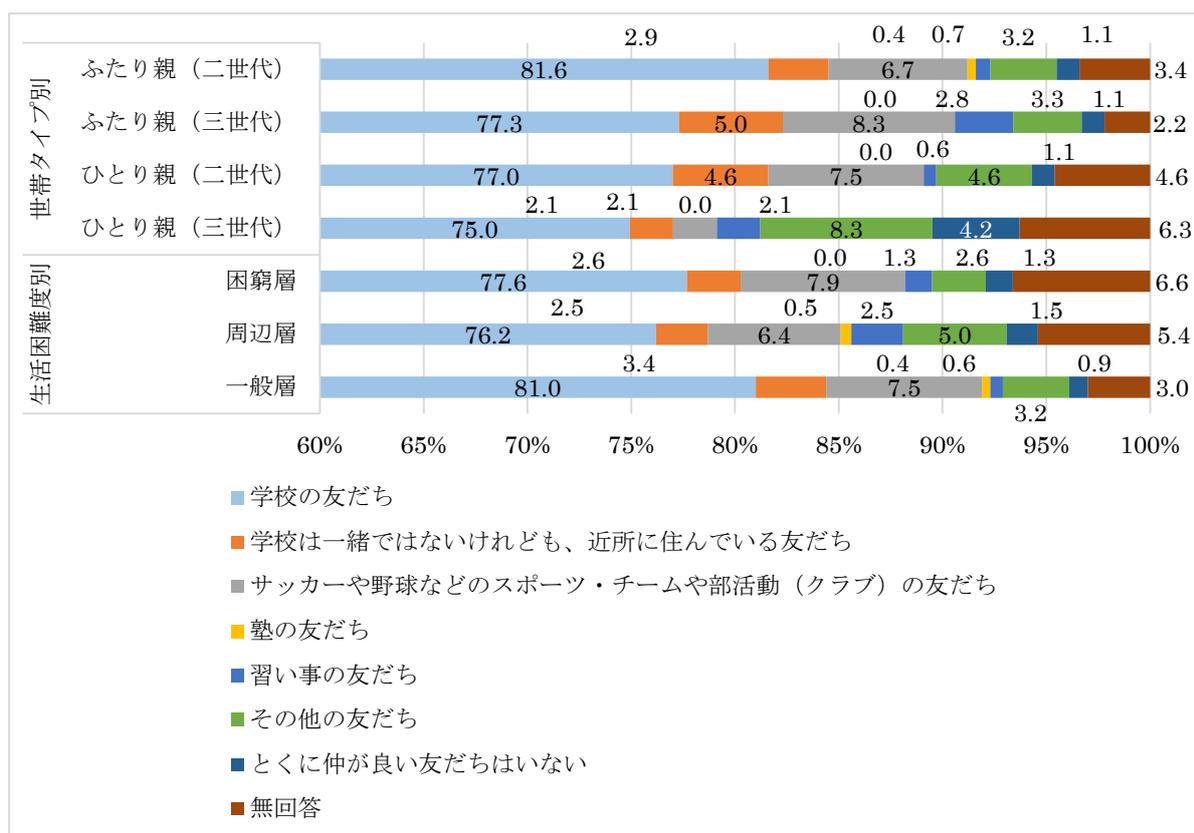
高くなる傾向が見られる。

図表 6-1-3 一番仲の良い友だち(小学 5 年生):世帯タイプ別(X)、生活困難度別(***)



中学 2 年生の「一番仲の良い友だち」を世帯タイプ別に見ると、統計的に有意な差が見られた。特に、「とくに仲が良い友だちはいない」を選択した割合はひとり親 (三世帯) 世帯では 4.2%となり、ふたり親 (二世帯) 世帯 1.1%、ふたり親 (三世帯) 世帯 1.1%、ひとり親 (二世帯) 世帯 1.1%よりも高くなる。しかしながら生活困難度別に見た場合においては、統計的に有意な差は見られなかった。

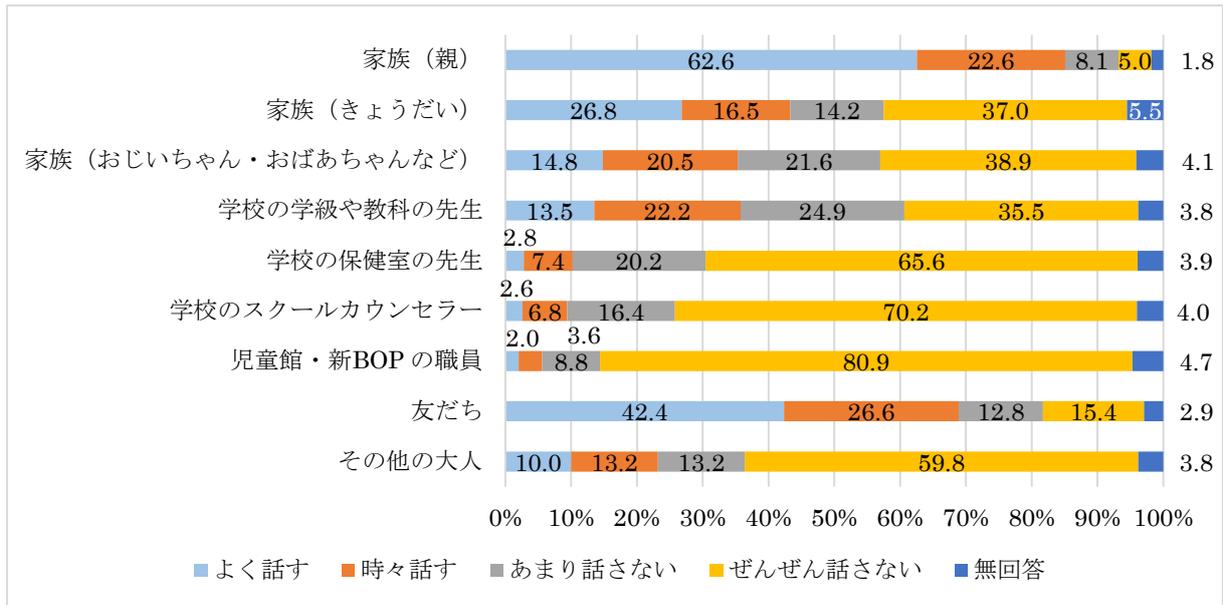
図表 6-1-4 一番仲の良い友だち(中学2年生):世帯タイプ別(*)、生活困難度別(X)



(2) 他の人との会話の頻度

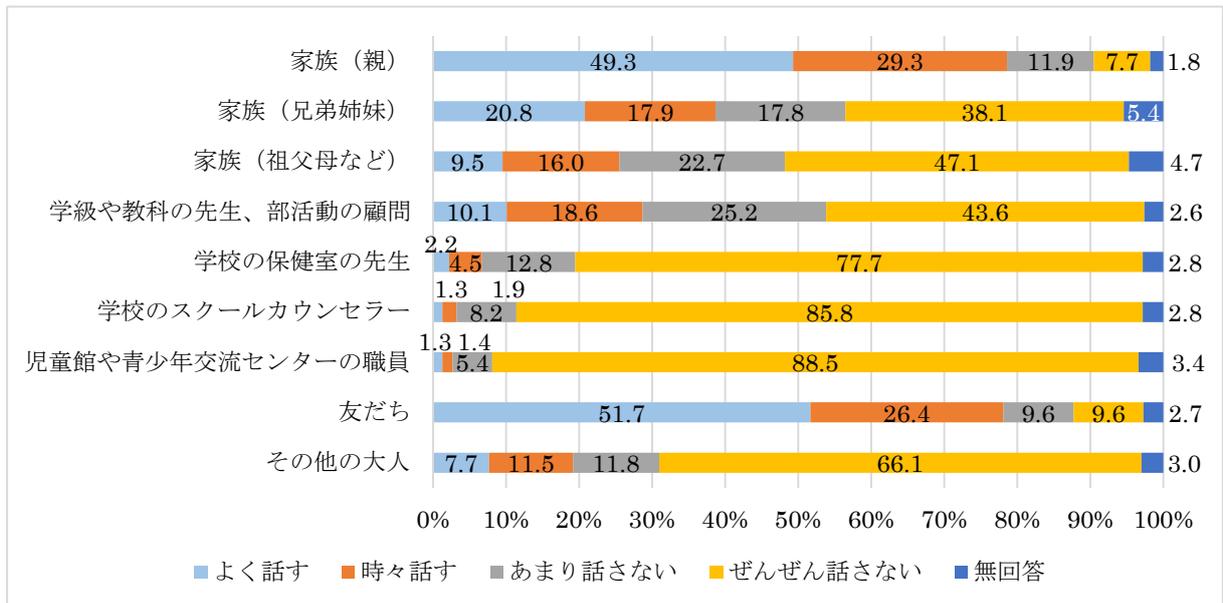
小学5年生で最もよく話している相手は、「家族(親)」62.6%、「友だち」42.4%、「家族(きょうだい)」26.8%となった。これに対し、中学2年生で最もよく話している相手は、「友だち」51.7%、「家族(親)」49.3%、「家族(兄弟姉妹)」20.8%となった。小学5年生と比較して「家族(親)」 「友だち」の順位が入れ替わっている。同様に、兄弟姉妹や祖父母との会話頻度も小学5年生より下がっており、思春期に入って人間関係の中心が家族関係から友人関係へとシフトしていると考えられる。なお、参考までに東京都調査の結果を示すと、最も良く話している相手が「家族(親)」である子どもの割合は、小学5年生は53.5%、中学2年生は42.7%である。

図表 6-1-5 会話の頻度(小学 5 年生)



*調査票における「その他の大人（地域のスポーツクラブのコーチや、塾・習い事の先生など）」との表記を、作表の関係上「その他の大人」とした。

図表 6-1-6 会話の頻度(中学 2 年生)



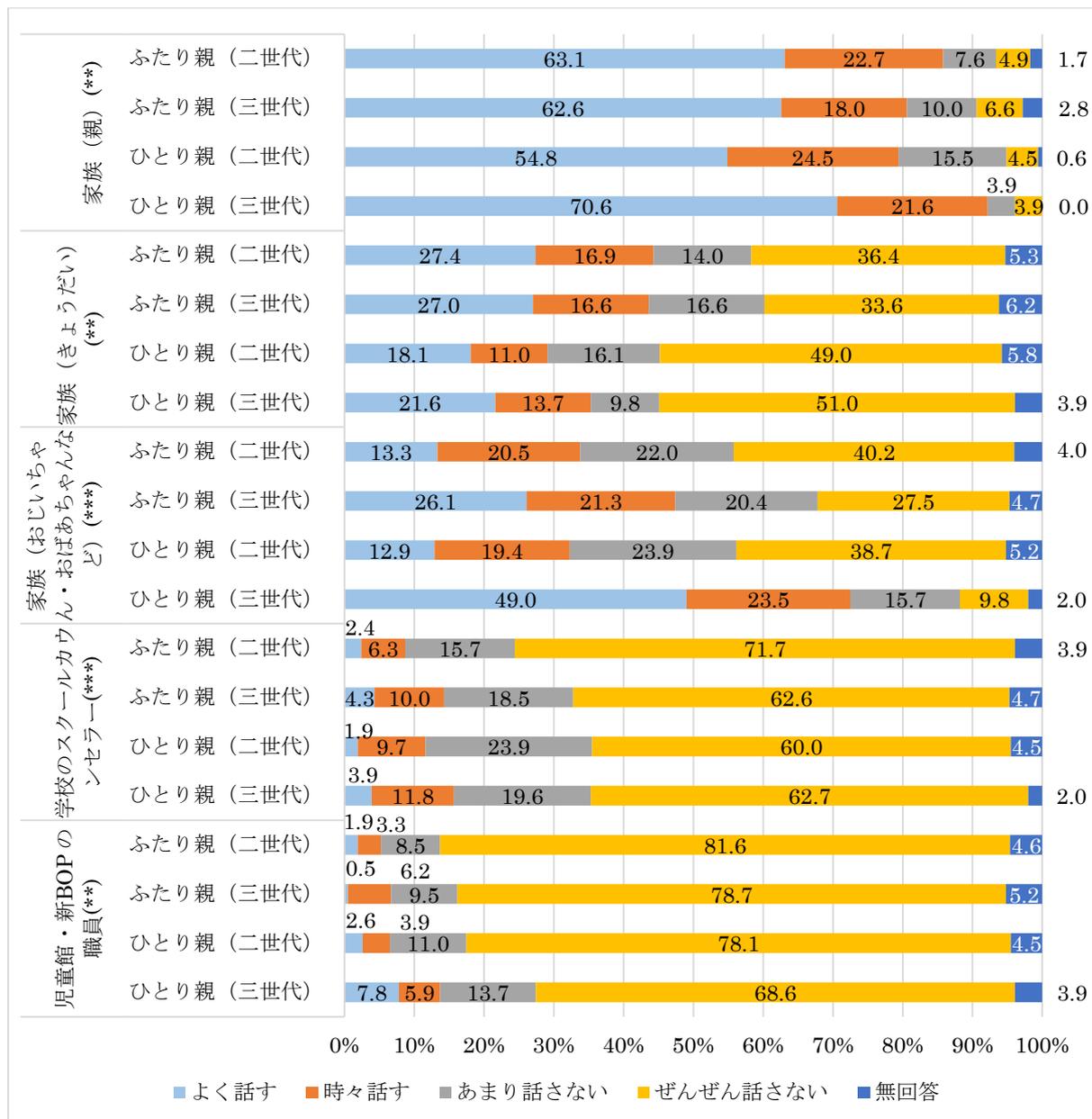
世帯タイプ別に見ると、小学 5 年生では、「家族（親）」「家族（きょうだい）」「家族（おじいちゃん・おばあちゃんなど）」「学校のスクールカウンセラー」「児童館・新 BOP の職員」で統計的に有意な差が見られた。「家族（親）」と話す頻度は、ふたり親（二世帯、三世帯）世帯は、全体の傾向と同様だが、ひとり親（二世帯）世帯では有意に下がり（「よく話す」54.8%）、ひとり親（三世帯）世帯では有意に上がる（「よく話す」70.6%）。ひとり親（二世帯）世帯の親は、多忙さゆえに、子どもとの会話の頻度が減っていると考えられる。同時に、ひとり親世帯であっても

祖父母と同居している場合には、むしろ親子の会話の頻度がその他の世帯タイプよりも増加する点も興味深い。また、ひとり親（三世代）世帯は、親だけでなく、祖父母と会話する頻度も最も高い（「よく話す」49.0%）。ただし、「家族（きょうだい）」「家族（おじいちゃん・おばあちゃんなど）」の結果については、そもそも兄弟姉妹がいるかどうか、祖父母と同居しているかどうかにより大きく影響を受けていると考えられる。

「学校のスクールカウンセラー」では「よく話す」「時々話す」を合わせた割合はふたり親（二世代）世帯で 8.7%、ひとり親（二世代）世帯で 11.6%なのに対し、ふたり親（三世代）世帯で 14.3%、ひとり親（三世代）世帯で 15.7%と三世代世帯の子どもの方がスクールカウンセラーと話をしている傾向が見られる。「児童館・新BOPの職員」と話をする割合は「よく話す」「時々話す」を合わせるとふたり親（二世代）世帯 5.2%、ふたり親（三世代）世帯 6.7%、ひとり親（二世代）世帯 6.5%に対し、ひとり親（三世代）世帯では 13.7%と高くなる。詳細は不明だが、ひとり親（三世代）世帯の子どもは、スクールカウンセラーや児童館職員などに、より話をする傾向が見られる。

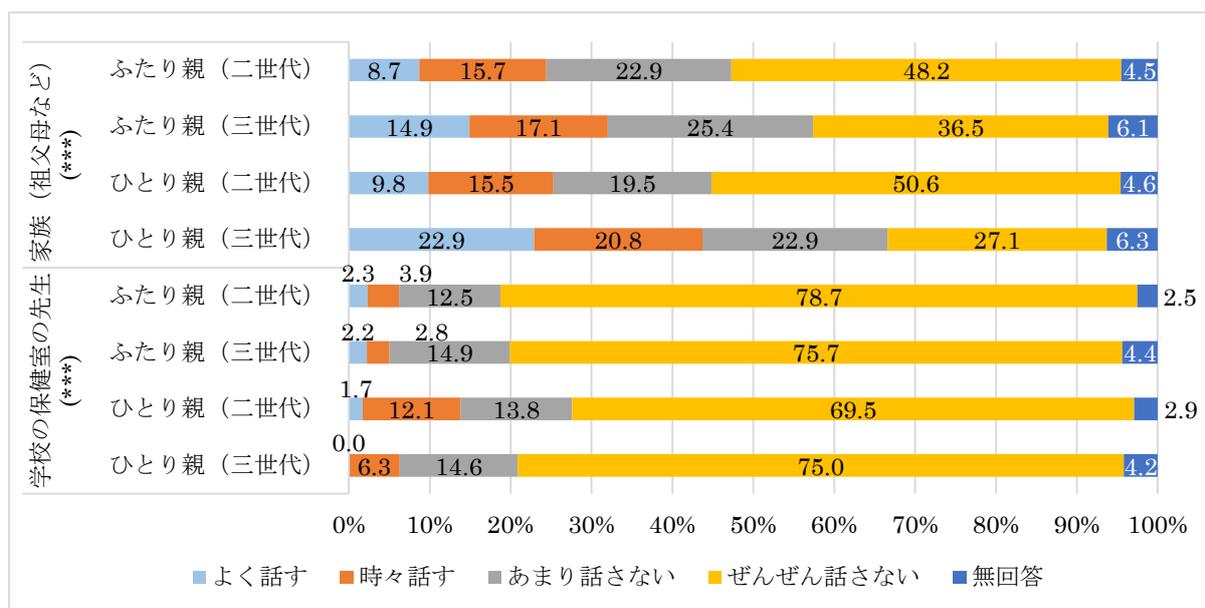
中学2年生については、「家族（祖父母など）」「学校の保健室の先生」で統計的に有意な差が見られた。中学2年生においても「家族（祖父母など）」と「よく話す」割合が最も高いのは、ひとり親（三世代）世帯の子どもであった（22.9%）。また、「学校の保健室の先生」に「ぜんぜん話さない」割合は、ふたり親（二世代）世帯で 78.7%、ふたり親（三世代）世帯で 75.7%、ひとり親（三世代）世帯で 75.0%なのに対し、ひとり親（二世代）世帯では 69.5%となる。ひとり親（二世代）世帯では家庭で気軽に話せる大人がいない分、保健室の先生と話している可能性が考えられる。

図表 6-1-7 会話の頻度(小学 5 年生):世帯タイプ別



*有意な結果のみ作表。

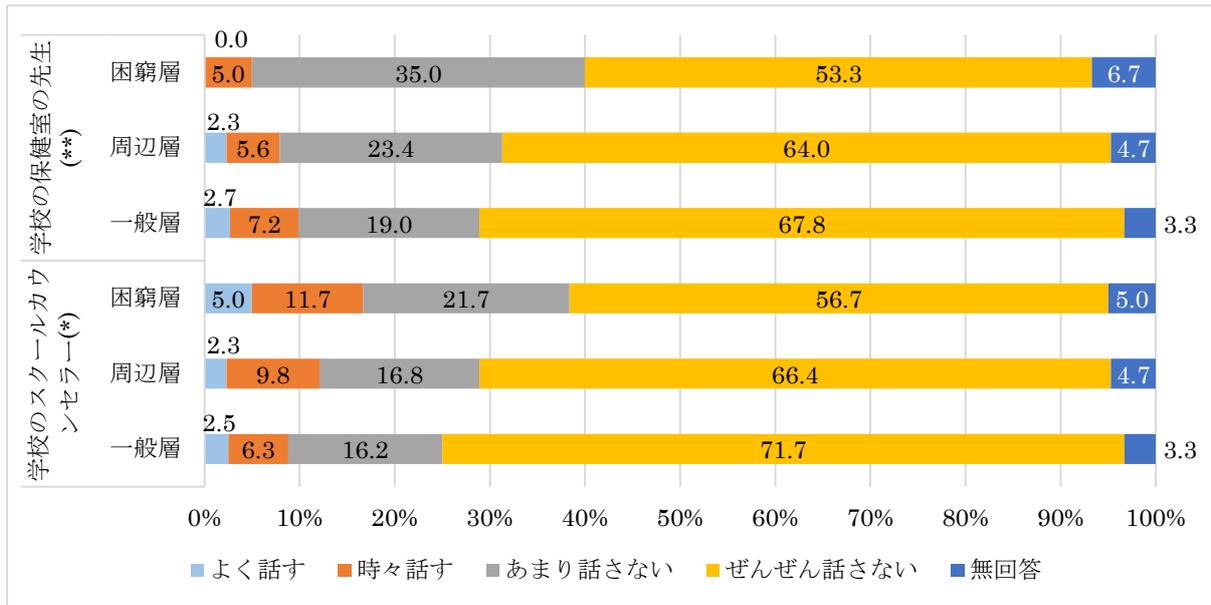
図表 6-1-8 会話の頻度(中学 2 年生):世帯タイプ別



*有意な結果のみ作表。

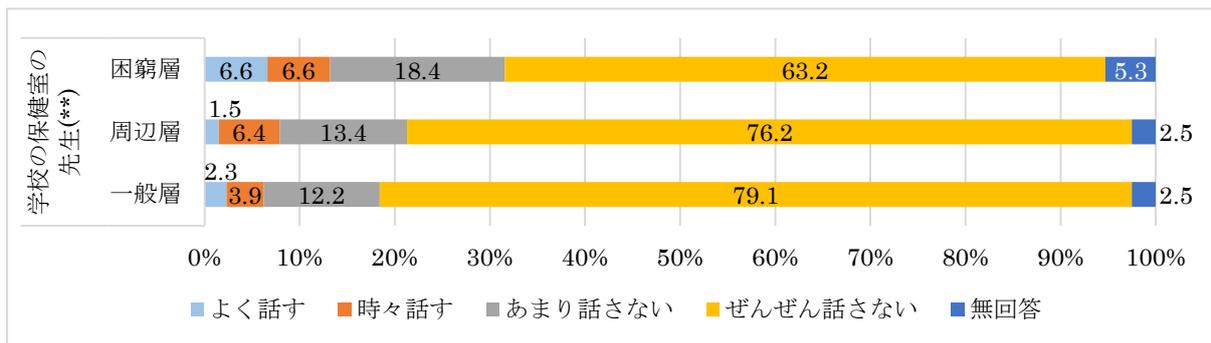
生活困難度別に見ると、小学 5 年生では、「学校の保健室の先生」「学校のスクールカウンセラー」で統計的に有意な差が見られ、中学 2 年生では「学校の保健室の先生」においてのみ有意な差が見られた。「学校の保健室の先生」には、小学 5 年生は「よく話す」「時々話す」を合わせると困窮層 5.0%、周辺層 7.9%、一般層 9.9%と生活困難度が上がるほど話をしない傾向がうかがえる。これに対し、中学 2 年生では、「よく話す」「時々話す」の割合を足し合わせると、困窮層 13.2%、周辺層 7.9%、一般層 6.2%と、生活困難度が上がるほど話をする、という反対の結果となった。また、「学校のスクールカウンセラー」に「よく話す」「時々話す」小学 5 年生の割合は、困窮層 16.7%、周辺層 12.1%、一般層 8.8%であり、生活困難度が上がるほどスクールカウンセラーに話をしている。

図表 6-1-9 会話の頻度(小学 5 年生):生活困難度別



*有意な結果のみ作表。

図表 6-1-10 会話の頻度(中学 2 年生):生活困難度別

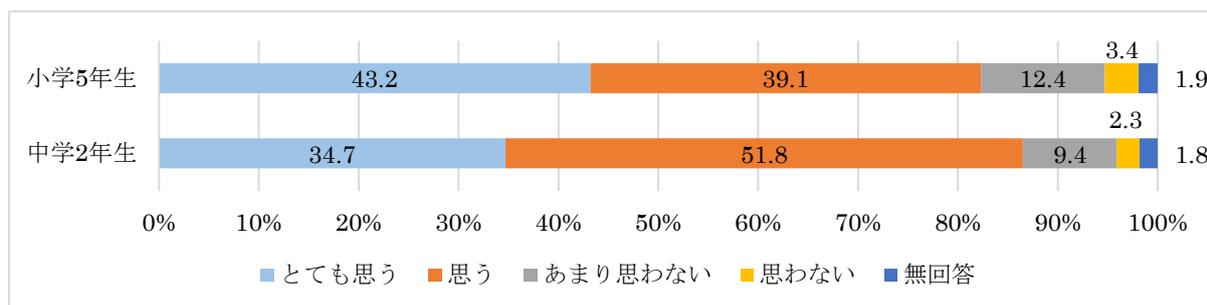


*有意な結果のみ作表。

(3) 人間関係についての評価

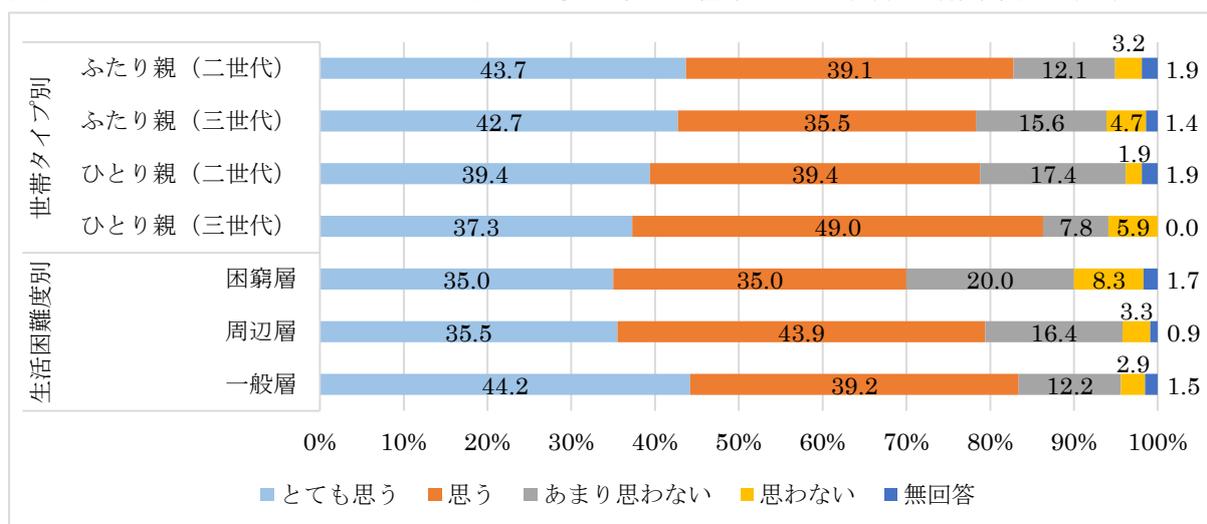
友だちに好かれていると思うかという問いに対し、小学 5 年生では「とても思う」43.2%、「思う」39.1%、「あまり思わない」12.4%、「思わない」3.4%となった。「とても思う」「思う」、を合わせた割合は 82.3%となった。中学 2 年生では「とても思う」34.7%、「思う」51.8%、「あまり思わない」9.4%、「思わない」2.3%となった。中学 2 年生の 8 割超が友人から好かれていると考えている。中学 2 年生では、小学 5 年生より「とても思う」の割合が低くなる一方で、「あまり思わない」「思わない」の割合も低くなる。

図表 6-1-11 友だちに好かれていると思う(小学 5 年生、中学 2 年生)



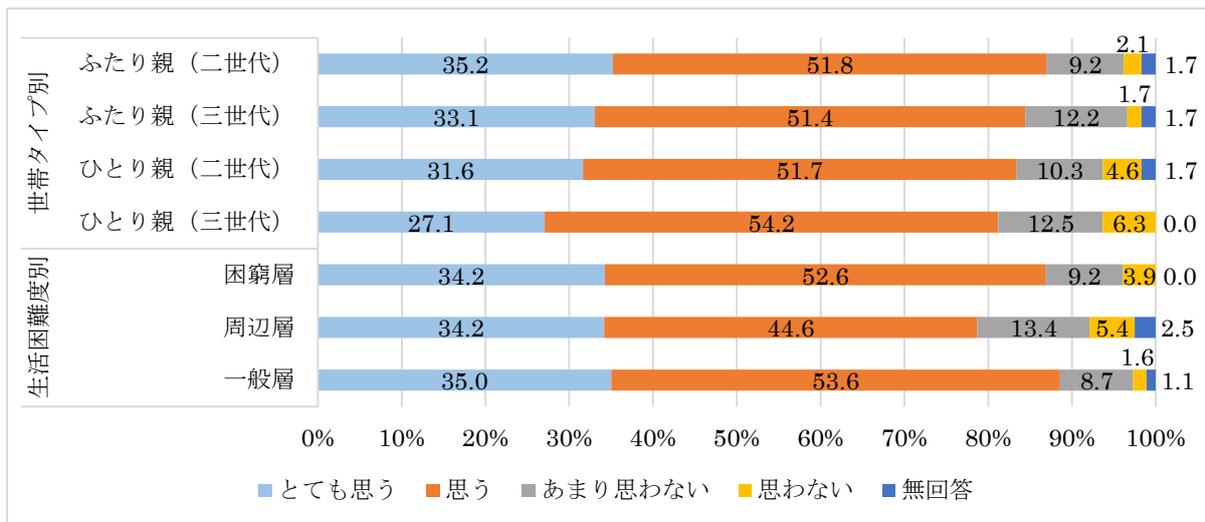
小学 5 年生では、世帯タイプ別で見ると、統計的に有意な差は見られなかった。どの世帯タイプでも約 8 割の子どもが友人から好かれていると考えている。他方でこの割合を生活困難度別に見ると、統計的に有意な差が見られた。「とても思う」の割合は一般層では 44.2%なのに対し、困窮層では 35.0%、周辺層では 35.5%と生活困難層では低い割合となる。「あまり思わない」「思わない」をあわせた割合は生活困難度が上がるほど高くなり、困窮層 28.3%、周辺層 19.7%、一般層 15.1%となる。

図表 6-1-12 友だちに好かれていると思う(小学 5 年生):世帯タイプ別(X)、生活困難度別(**)



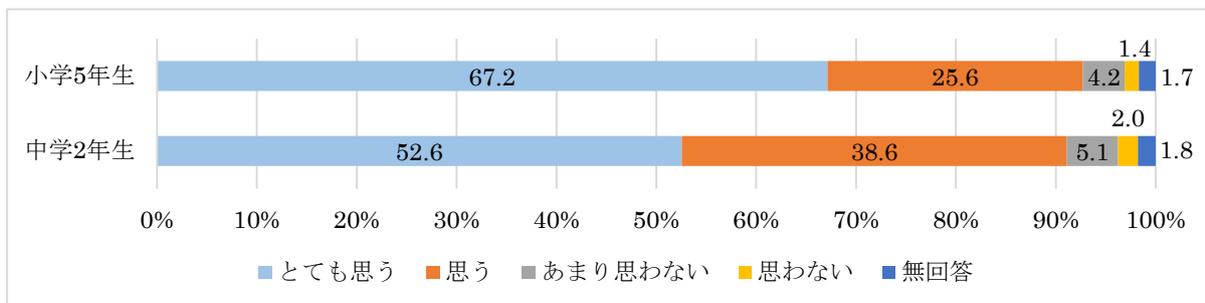
中学 2 年生では、世帯タイプ別に見ると、統計的に有意な差は見られなかったが、生活困難度別では統計的に有意な差が見られる。「とても思う」は困窮層、周辺層、一般層で 34.2%~35.0%とそれほど違いは見られないが、「あまり思わない」と「思わない」をあわせた割合は困窮層で 13.1%、周辺層 18.8%、一般層 10.3%となり困窮層、周辺層の方が一般層よりも高い傾向にある。世帯の経済状況と友人関係についての評価には関連があると考えられる。

図表 6-1-13 友だちに好かれていると思う(中学 2 年生):世帯タイプ別(X)、生活困難度別(***)



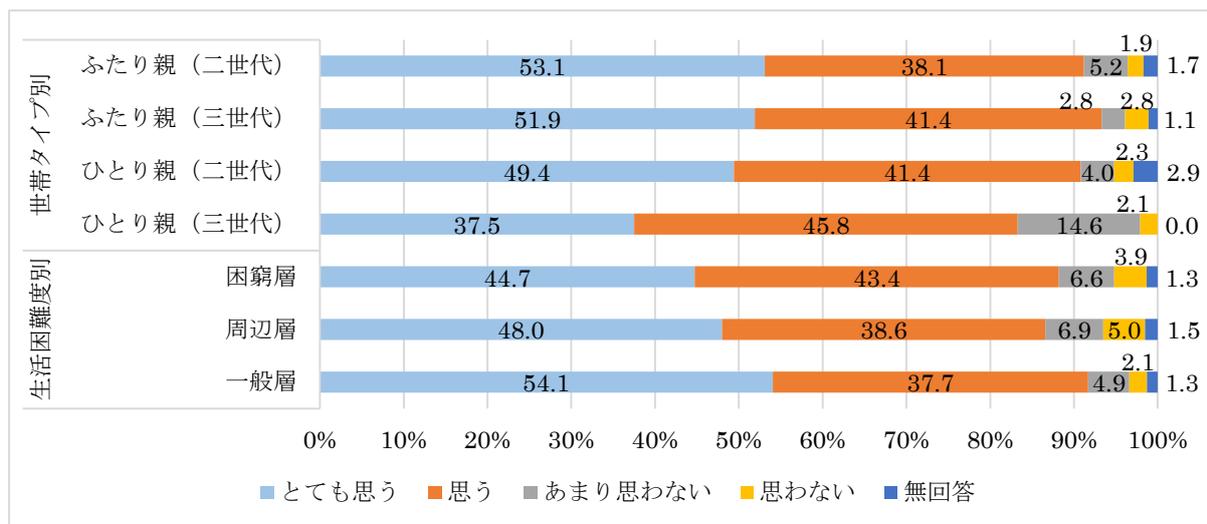
次に、「家族に大切にされていると思うか」という問いに対する回答については、小学 5 年生では「とても思う」が 67.2%、「思う」が 25.6%、「あまり思わない」が 4.2%、「思わない」が 1.4% となった。「とても思う」「思う」を合わせた割合は 9 割を超える一方で、5.6%の子どもは家族に大切にされていると「あまり思わない」「思わない」と回答している。中学 2 年生では「とても思う」が 52.6%、「思う」が 38.6%、「あまり思わない」が 5.1%、「思わない」が 2.0%となった。中学 2 年生は、小学 5 年生に比べて、「とても思う」の割合が減り、また、「あまり思わない」「思わない」の割合が高くなっている。

図表 6-1-14 家族に大事にされていると思う(小学 5 年生、中学 2 年生)



小学 5 年生において、この割合を世帯タイプ別、生活困難度別に見た場合、統計的に有意な差はなかった。一方、中学 2 年生では、世帯タイプ別、生活困難度別に見ると、いずれも統計的に有意な差が見られた。世帯タイプ別では「あまり思わない」「思わない」を合わせた割合はふたり親 (二世帯) 世帯 7.1%、ふたり親 (三世帯) 世帯 5.6%、ひとり親 (二世帯) 世帯 6.3%に対し、ひとり親 (三世帯) 世帯 16.7%となった。生活困難度別に見ると、「とても思う」の割合は困窮層 44.7%、周辺層 48.0%と生活困難度があがるほど低い割合となる。「あまり思わない」「思わない」をあわせた割合は、一般層で 7.0%なのに対し、周辺層では 11.9%、困窮層では 10.5%となった。

図表 6-1-15 家族に大事にされていると思う(中学 2 年生):世帯タイプ別(*)、生活困難度別(*)



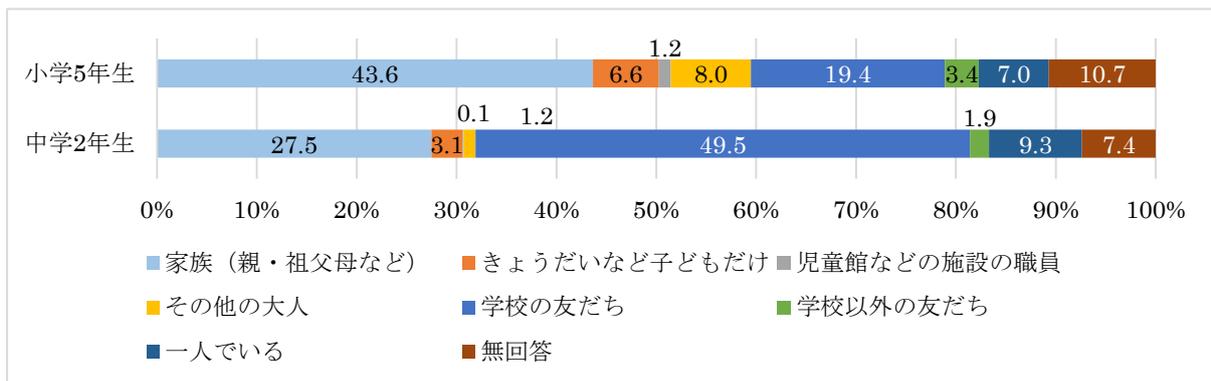
2. 子どもの平日・休日の過ごし方

(1) 平日の放課後を一緒に過ごす人・過ごす場所

本調査では、子ども本人に平日の放課後の過ごし方について答えてもらっている。まず、平日の放課後を誰と過ごすかの回答を見ると、小学5年生では「家族（親・祖父母など）」が最も多く43.6%、次いで「学校の友だち」19.4%、「その他の大人」8.0%、「一人である」7.0%、「きょうだいなど子どもだけ」6.6%、「学校以外の友だち」3.4%、「児童館などの施設の職員」1.2%となる。「一人である」は4番目に高い数字となっている。

中学2年生では、「学校の友だち」49.5%が最も多く、次に「家族（親・祖父母など）」27.5%、「一人である」9.3%、「きょうだいなど子どもだけ」3.1%、「学校以外の友だち」1.9%、「その他の大人」1.2%、「児童館などの施設の職員」0.1%と続く。小学5年生が「家族」と過ごしている割合がもっとも高かったのに対し中学2年生では「学校の友だち」となっているが、これは人間関係の中心が友人関係となっていることの反映と考えられる。また「一人である」の順位もあがり、3番目となっている。

図表 6-2-1 平日の放課後に一緒に過ごすことが最も多い人



*調査票における「家族（おじいちゃん・おばあちゃん、親せきなども含みます）」「きょうだい（いとこなど親せきも含みます）」など子ども（17歳まで）だけである」「その他の大人（近所の大人、塾や習い事、民間の学童クラブの先生など）」「学校以外の友だち（地域のスポーツクラブ、近所の友だちなど）」を、作表の都合上それぞれ「家族」「きょうだいなど子どもだけ」「その他の大人」「学校以外の友だち」とした。また、小学5年生での「児童館、新BOP（区立小学校に通っている人）、その他の施設の職員」と中学2年生での「児童館や青少年交流センター、その他の施設の職員」を「児童館などの施設の職員」とした。

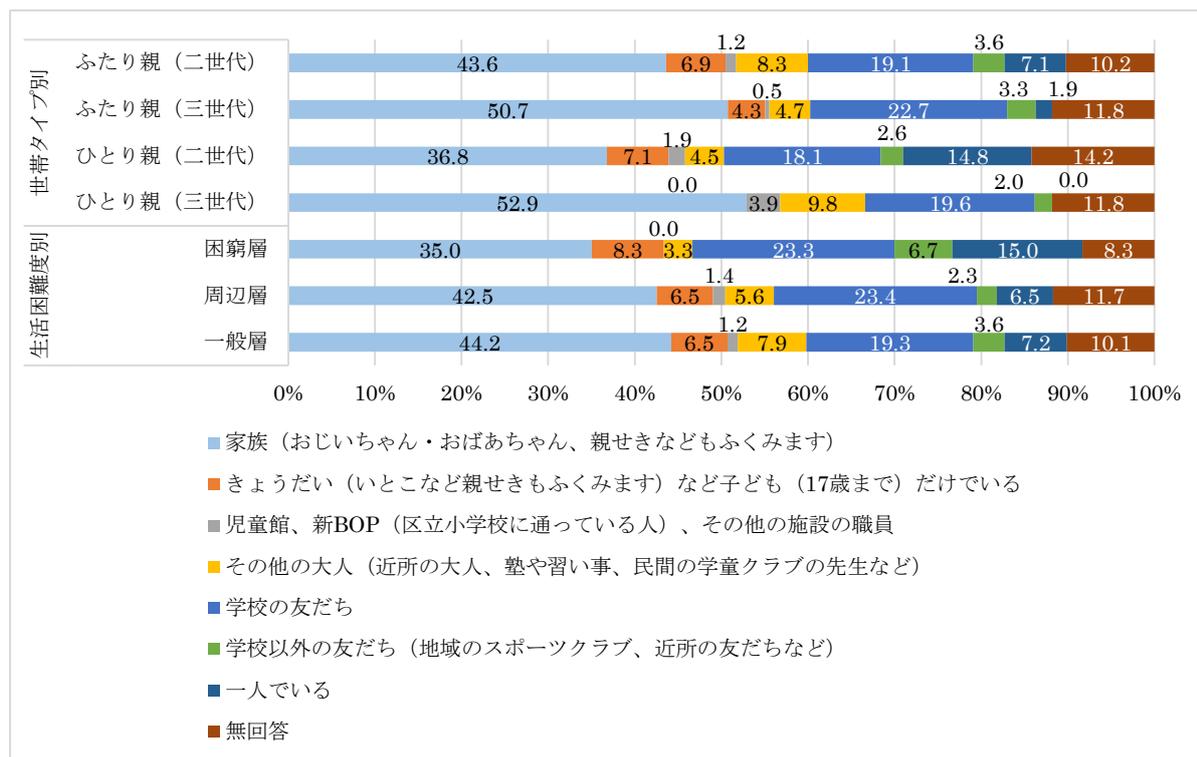
この割合を世帯タイプ別に見ると、小学5年生では統計的に有意な差が見られた。「家族（親・祖父母など）」と一番長く過ごす割合はふたり親（三世代）世帯、ひとり親（三世代）世帯でそれぞれ50.7%、52.9%であるのに対し、ふたり親（二世帯）世帯、ひとり親（二世帯）世帯ではそれぞれ43.6%、36.8%となり、同居する家族の構成の影響がうかがえる。特に、ひとり親（二世帯）世帯では家族と一緒に過ごす割合が最も低くなっており、「一人である」子どもの割合が高い。「一人である」と答えた割合は、ふたり親（二世帯）世帯7.1%、ふたり親（三世代）1.9%、ひとり親（二世帯）世帯14.8%、ひとり親（三世代）世帯0.0%となった。

他方、中学2年生においても世帯タイプによる有意な差があった。小学5年生同様、「家族（親・祖父母など）」と過ごす子どもの割合は、二世帯世帯において相対的に高く、三世帯世帯では相対

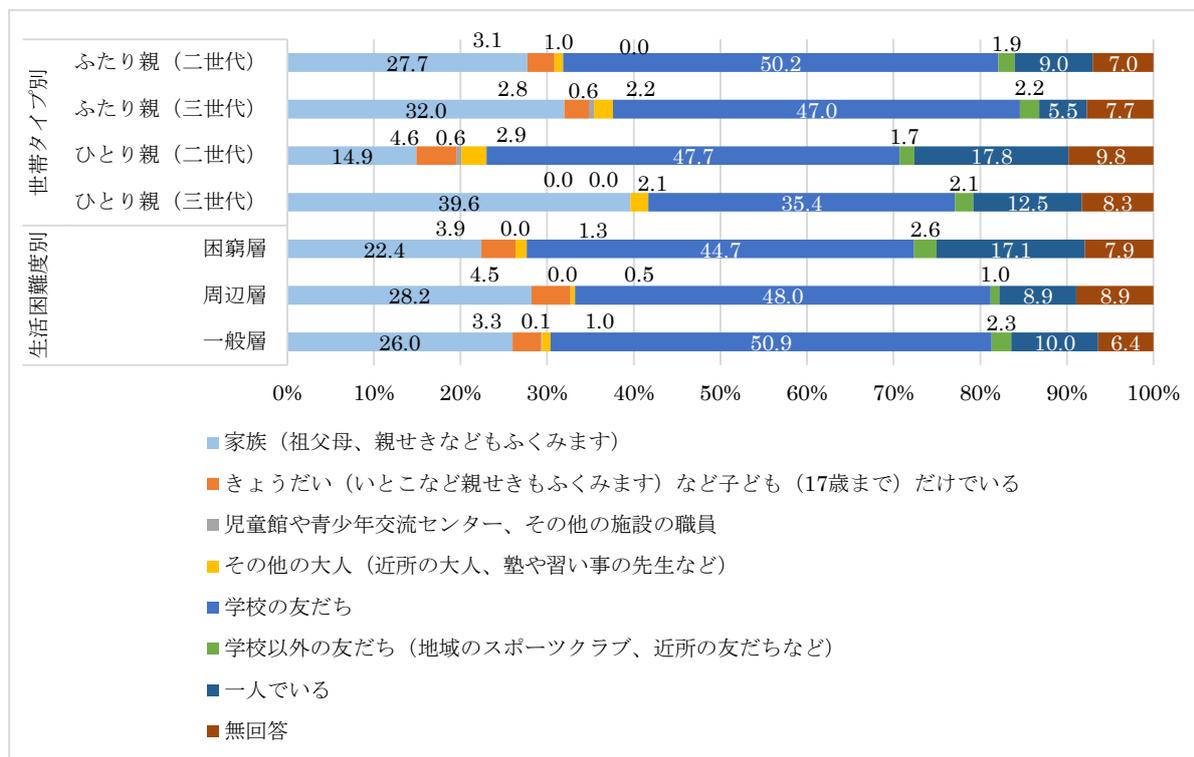
的に低い傾向がある。ただし、「一人である」と答えた割合は、ふたり親（二世帯）世帯 9.0%、ふたり親（三世帯） 5.5%、ひとり親（二世帯）世帯 17.8%、ひとり親（三世帯）世帯 12.5%であり、小学 5 年生と異なり、ひとり親（三世帯）世帯の子どもであっても、一人で過ごす者が 1 割以上存在する。

なお、両学年とも生活困難度別の差は確認されなかった。

図表 6-2-2 平日の放課後に一緒に過ごすことが最も多い人(小学 5 年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(X)

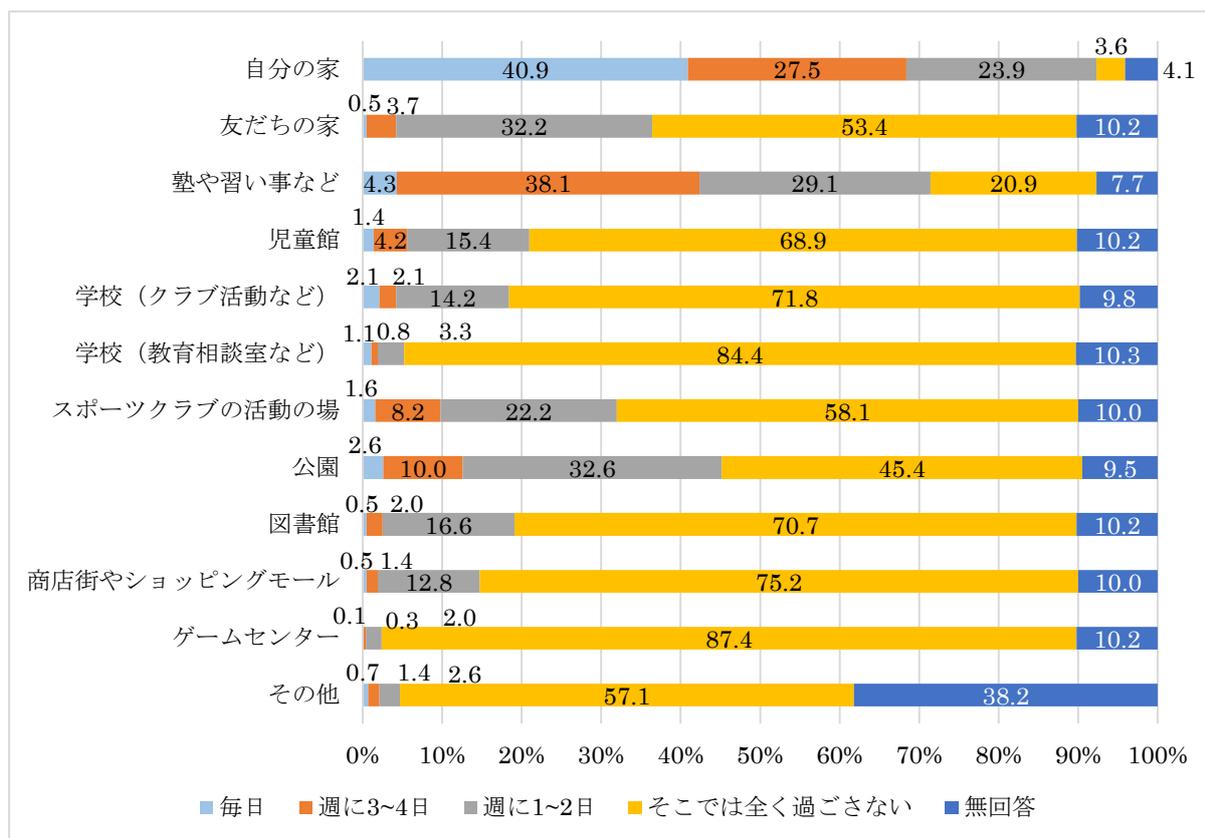


図表 6-2-3 平日の放課後に一緒に過ごすことが最も多い人(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(X)



平日の放課後をどこで過ごすかを見ると、小学 5 年生では、平日 3~4 日以上(「毎日」「週に 3~4 日」)放課後に過ごす場所は、「自分の家」が一番多く 68.4%、次に「塾や習い事など」42.4%、「公園」12.6%、「スポーツクラブの活動の場」9.8%と続く。「塾や習い事」については、「毎日」が 4.3%、「週に 3~4 日」が 38.1%と 4 割を超える子どもにとっての過ごし場所となっていることがわかる。「児童館」「学校(クラブ活動など)」「学校(教育相談室など)」「図書館」などの施設はこれらに比べて大幅に少なく「週に 1~2 日」を含めれば 5.2%~21.0%となる。一方「商店街やショッピングモール」「ゲームセンター」といった商業施設についてもそれぞれ 14.7%、2.4%が「週に 1~2 日」以上を過ごしている。

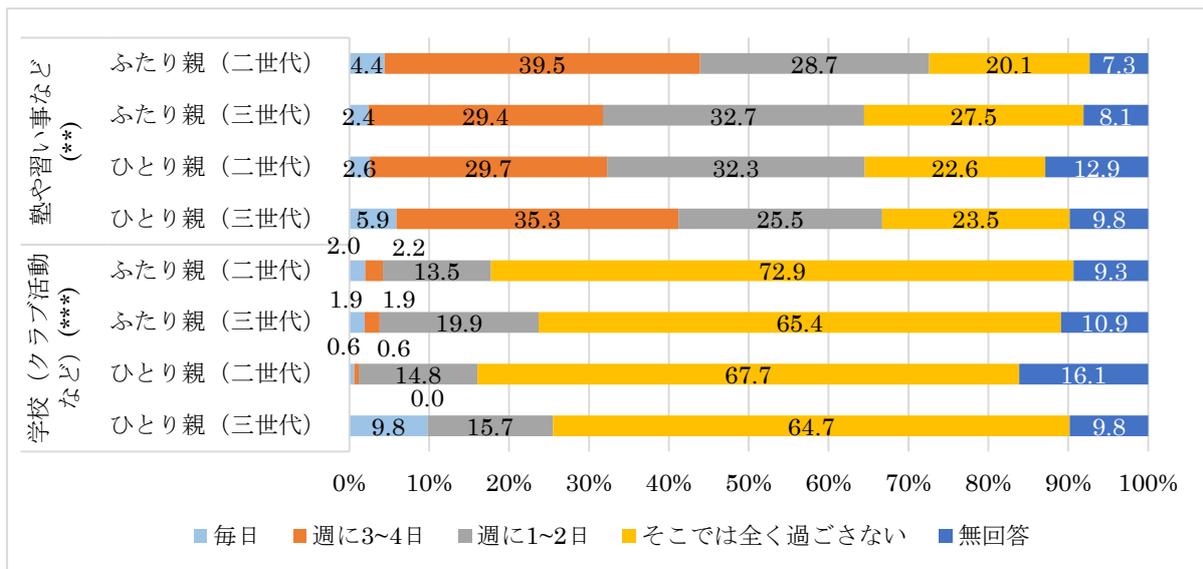
図表 6-2-4 平日の放課後に過ごす場所(小学5年生)



*調査票における「塾や習い事(スポーツはのぞく)、民間の学童クラブ」「学校(クラブ活動、新BOP(区立小学校で行っている放課後の遊び場のこと)など)」「学校(教育相談室、保健室)」「スポーツクラブの活動の場(野球場、サッカー場など)」を、作表の都合上それぞれ「塾や習い事など」「学校(クラブ活動など)」「学校(教育相談室など)」「スポーツクラブの活動の場」とした。

この割合を世帯タイプ別に見ると、「塾や習い事など」「学校(クラブ活動など)」で統計的に有意な差が見られた。「塾や習い事など」で週3~4日以上過ごす割合はふたり親(二世帯)世帯で43.9%、ふたり親(三世帯)世帯で31.8%、ひとり親(二世帯)世帯で32.3%、ひとり親(三世帯)世帯で41.2%となる。「学校(クラブ活動など)」で週に3~4日以上過ごす割合はふたり親(二世帯)世帯で4.2%、ふたり親(三世帯)世帯で3.8%、ひとり親(二世帯)世帯で1.2%に対し、ひとり親(三世帯)世帯では9.8%とやや高くなる。なお、「その他」においても有意な差が見られたが、「無回答」の割合の占める割合が大きく、解釈が難しいためここでは掲載しない。

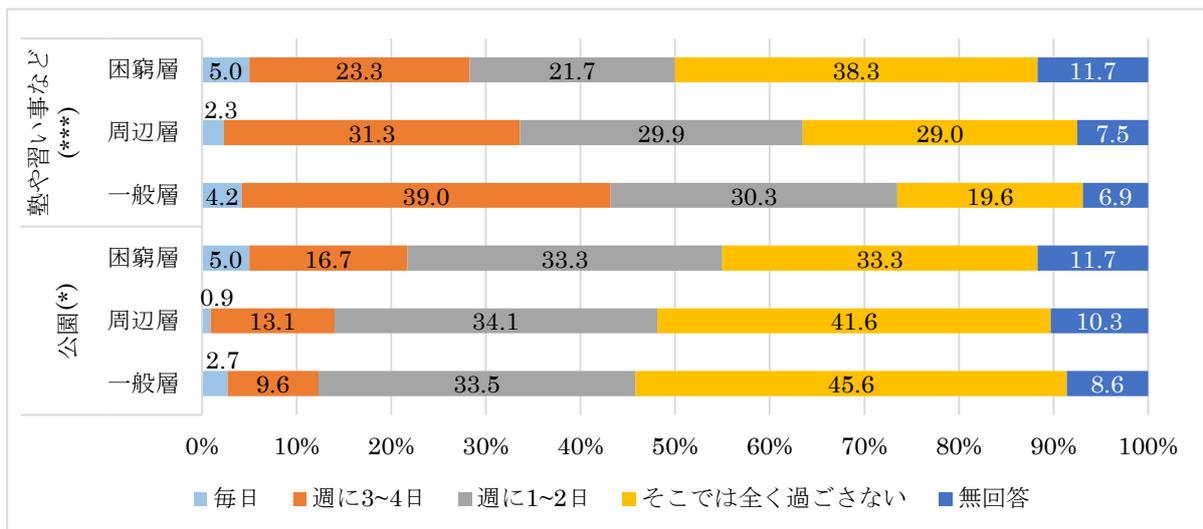
図表 6-2-5 平日の放課後に過ごす場所(小学5年生):世帯タイプ別



*有意な結果のみ作表。

同じくこの割合を生活困難度別に見ると、「塾や習い事など」「公園」で統計的に有意な差が見られた。「塾や習い事など」で週に1~2日以上過ごす割合は困窮層で50.0%、周辺層63.5%、一般層73.5%と生活困難度が上がるほど低くなる傾向にある。「公園」で週に1~2日以上過ごす割合は困窮層で55.0%、周辺層48.1%、一般層45.8%と生活困難度が上がるほど高くなる傾向が見られる。生活困難度の差が「塾や習い事」といった有料サービスの利用と「公園」という無料公共施設の利用の頻度の差という形で表れていると考えられる。

図表 6-2-6 平日の放課後に過ごす場所(小学5年生):生活困難度別

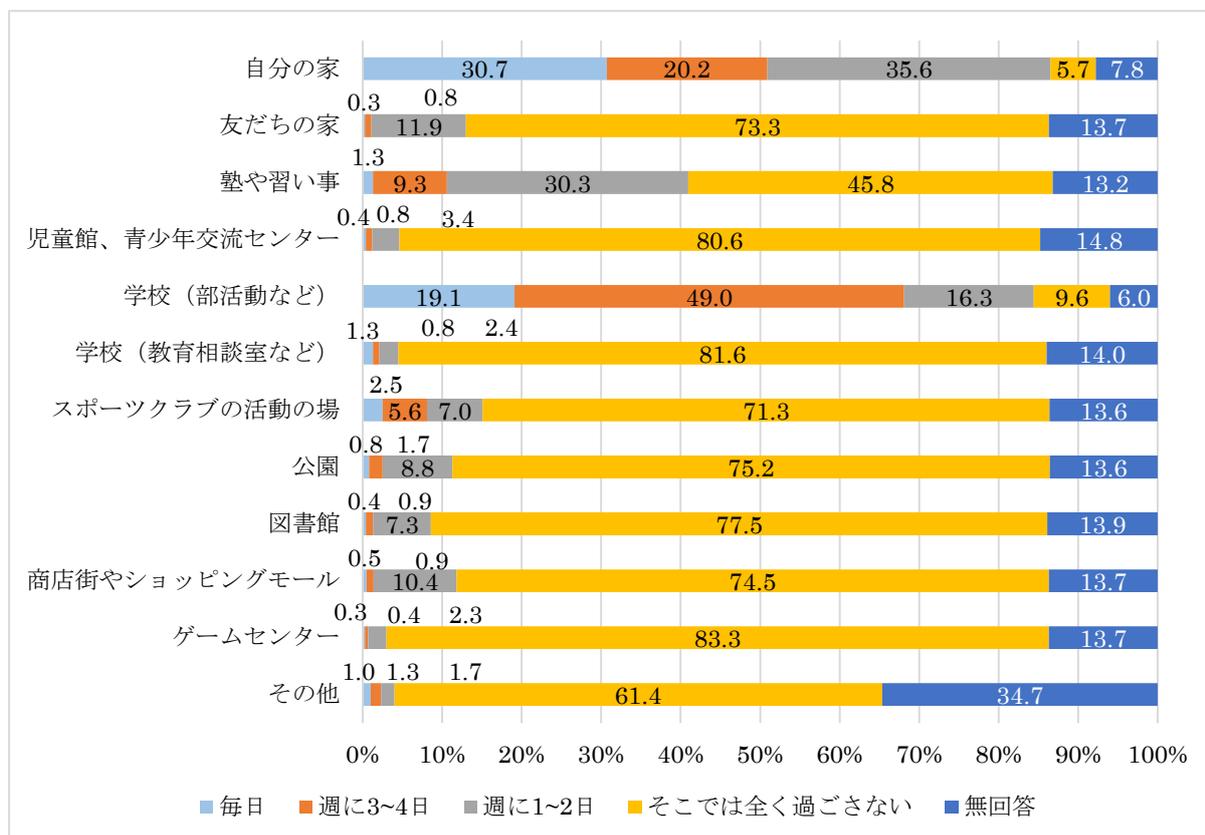


*有意な結果のみ作表。

中学2年生については、平日3~4日以上放課後に過ごす場所は、「学校(部活動など)」が68.1%、

「自分の家」が50.9%、「塾や習い事」が10.6%となる。「公園」「児童館、青少年交流センター」「図書館」などの公共施設で過ごす割合は「週に1~2日」を含めると11.3%、4.6%、8.6%となる。一方「商店街やショッピングモール」「ゲームセンター」といった商業施設についてもそれぞれ11.8%、3.0%が「週に1~2日」以上を過ごしている。

図表 6-2-7 平日の放課後に過ごす場所(中学2年生)

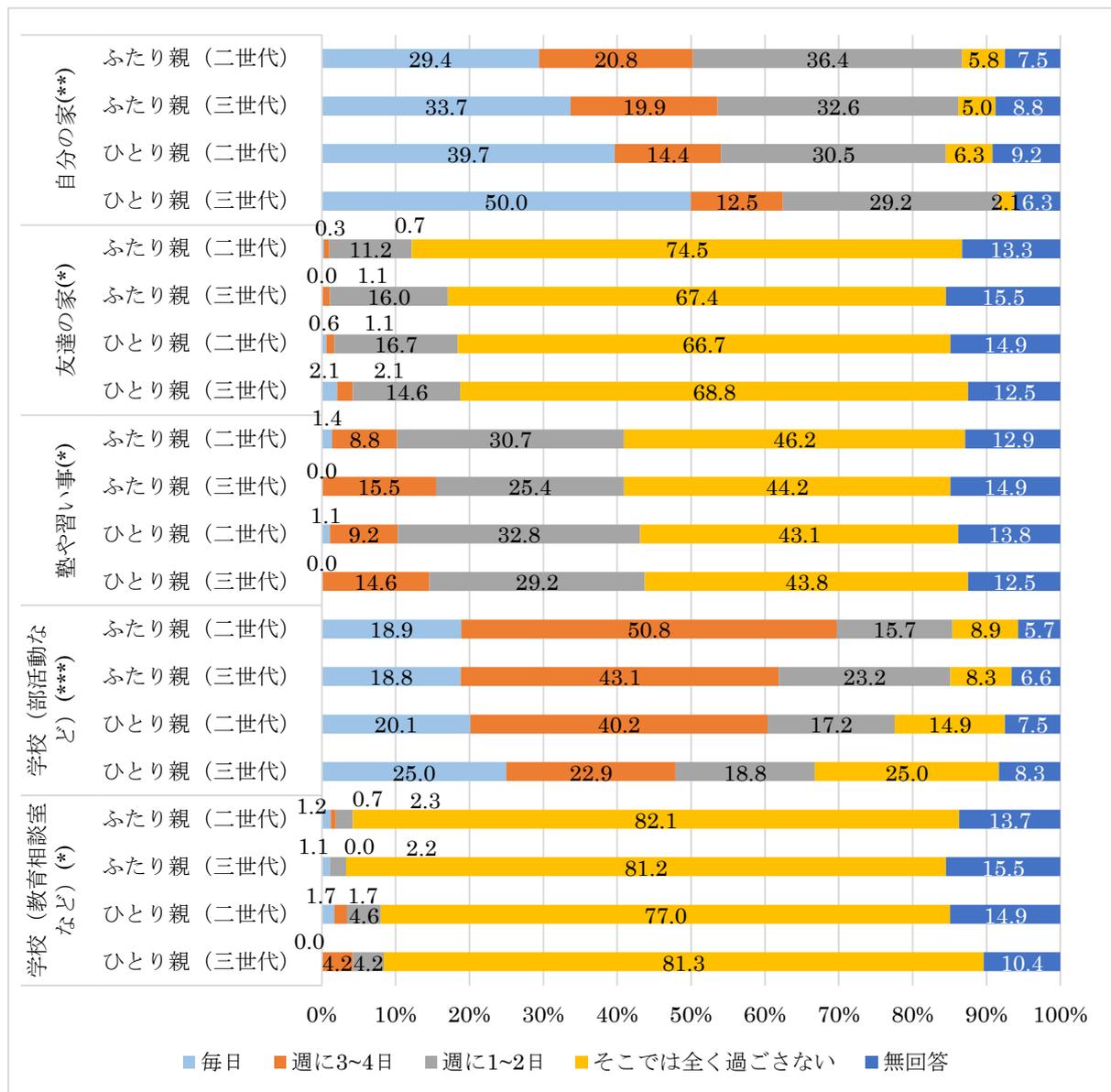


*調査票における「塾や習い事(スポーツはのぞく)」「学校(教育相談室、保健室)」「スポーツクラブの活動の場(野球場、サッカー場など)」を、作表の都合上それぞれ「塾や習い事」「学校(教育相談室など)」「スポーツクラブの活動の場」とした。

この割合を世帯タイプ別に見ると、「自分の家」「友だちの家」「塾や習い事」「学校(部活動など)」「学校(教育相談室など)」で統計的に有意な差が見られた。「自分の家」で毎日過ごす割合はふたり親(二世帯)世帯で29.4%、ふたり親(三世帯)世帯で33.7%なのに対し、ひとり親(二世帯)世帯では39.7%、ひとり親(三世帯)世帯では50.0%となり、ひとり親世帯の方が自宅で過ごす傾向が見られる。「友だちの家」で週に3~4日以上過ごす割合を見ると、ふたり親(二世帯)世帯で1.0%、ふたり親(三世帯)世帯で1.1%、ひとり親(二世帯)世帯で1.7%、ひとり親(三世帯)世帯で4.2%となり、ひとり親世帯の方がやや高くなる。「塾や習い事」で週に2日以下しか過ごさない割合を見ると、ふたり親(二世帯)世帯で76.9%、ひとり親(二世帯)世帯で75.9%、ふたり親(三世帯)世帯で69.6%、ひとり親(三世帯)世帯で73.0%となり、三世帯世帯の方が低くなる。「学校(部活動など)」で週に3~4日以上過ごす割合はふたり親(二世帯)世帯69.7%、ふたり親(三世帯)世帯61.9%、ひとり親(二世帯)世帯60.3%、ひとり親(三世帯)

世帯で 47.9%となり、ふたり親世帯の方が高い傾向にある。ひとり親世帯は自宅で過ごす割合も高く、部活動への参加等をせず自宅で過ごしているという生活パターンが比較的が多いことが示唆される。「学校（教育相談室など）」に週 2 日以下しかいかない割合はふたり親（二世帯）世帯 84.4%、ふたり親（三世帯）世帯 83.4%、ひとり親（二世帯）世帯 81.6%、ひとり親（三世帯）世帯で 85.5%となり、ひとり親（二世帯）世帯でやや低くなる。

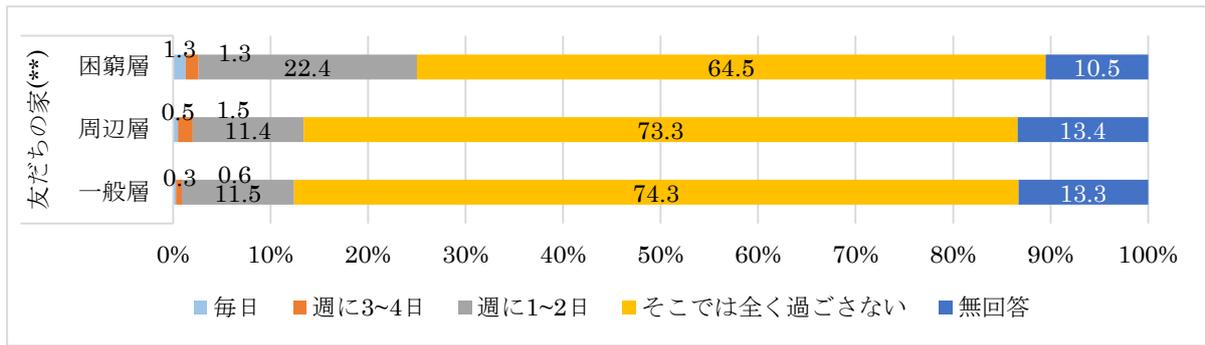
図表 6-2-8 平日の放課後に過ごす場所(中学 2 年生):世帯タイプ別



*有意な結果のみ作表。

同様に生活困難度別に見ると、「友だちの家」の項目で統計的に有意な差が見られた。「友だちの家」で週に 1~2 日以上過ごす割合は困窮層で 25.0%、周辺層で 13.4%、一般層で 12.4%となり生活困難度が上がるほど高くなる傾向が見られる。「塾や習い事」の項目は小学 5 年生が有意だったのに対し、中学 2 年生では有意にならなかった。

図表 6-2-9 平日の放課後に過ごす場所(中学 2 年生):生活困難度別

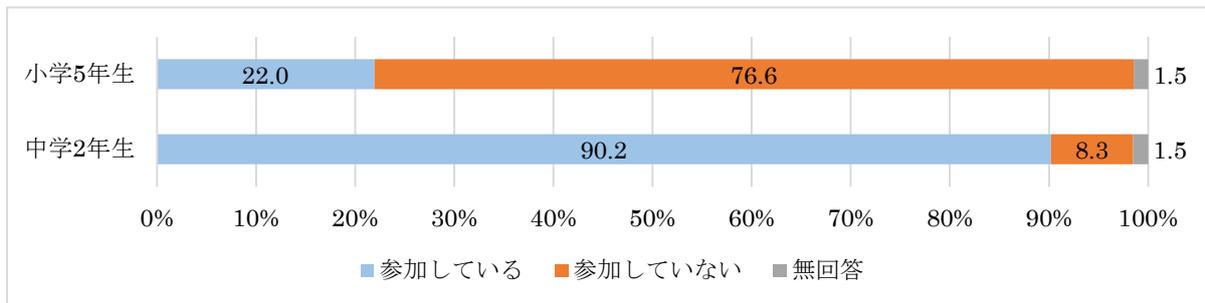


*有意な結果のみ作表。

(2) 新 BOP・部活動

子どもたちの放課後の活動状況を把握するため、小学生には新 BOP の、中学生には部活動の参加状況と、参加していない場合についてはその理由を尋ねた。小学 5 年生の新 BOP 参加状況は「参加している」が 22.0%、「参加していない」が 76.6%となった。この割合を世帯タイプ別、生活困難度別に見たが、いずれも統計的に有意な差は見られなかった。家計状況や世帯構成は新 BOP の利用状況には影響を与えていないといえる。一方、中学 2 年生の部活動の参加状況は、「参加している」が 90.2%、「参加していない」が 8.3%となった。

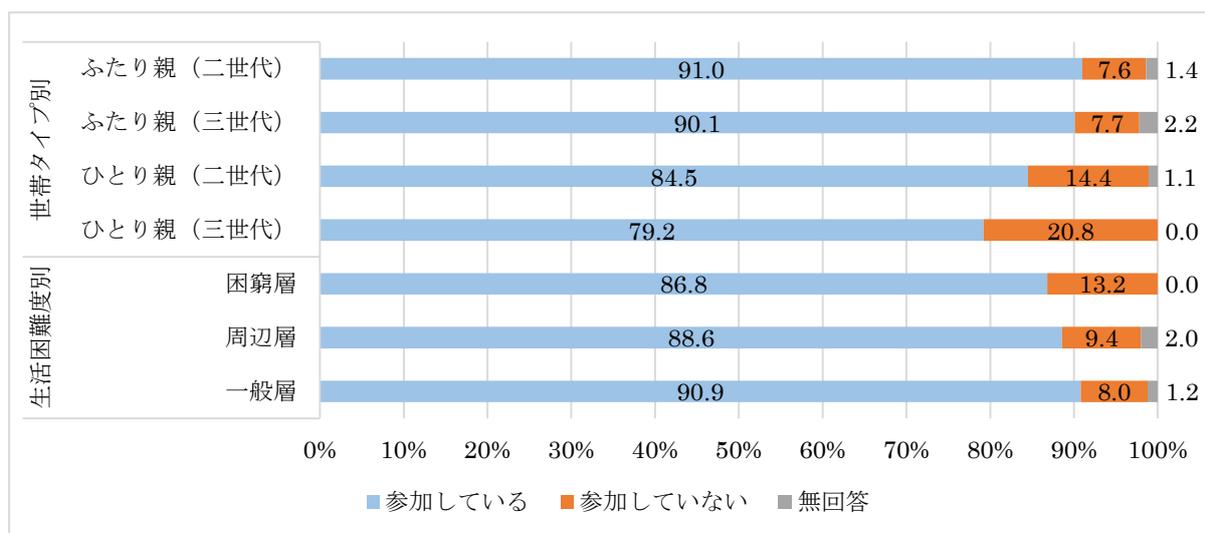
図表 6-2-10 新 BOP への参加の有無(小学 5 年生)、部活動への参加の有無(中学 2 年生)



*小学生は公立小学校児童のみ集計。

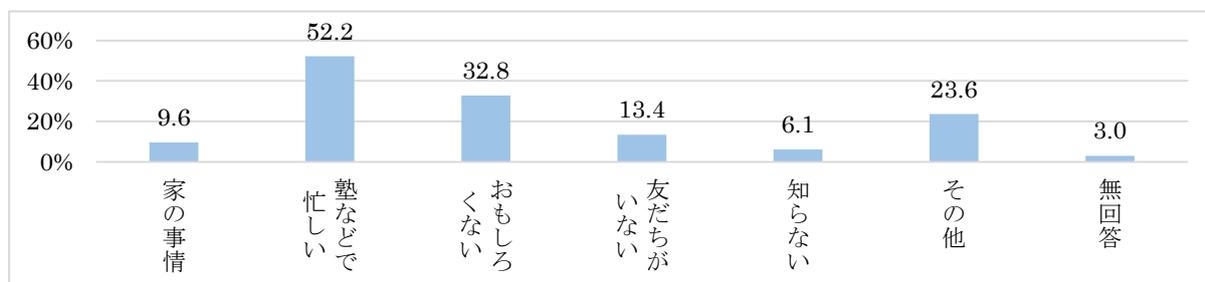
中学 2 年生について、この割合を世帯タイプ別、生活困難度別に見ると、世帯タイプ別においてのみ統計的に有意な差が見られる。ふたり親(二世帯)世帯 91.0%、ふたり親(三世帯)世帯 90.1%、ひとり親(二世帯)世帯 84.5%、ひとり親(三世帯)世帯 79.2%となり、ふたり親世帯の方が部活動に参加しているといえる。

図表 6-2-11 部活動への参加の有無(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(X)



小学 5 年生に、新 BOP に参加しない理由を聞いたところ、最も多かったのは「塾などで忙しい」であり 52.2%、次に多かったのが「おもしろくない」で 32.8%であった。また、「家の事情」をあげた子どもは 9.6%、「友だちがいない」は 13.4%、「知らない」は 6.1%、「その他」は 23.6%であった。

図表 6-2-12 新 BOP に参加しない理由(小学 5 年生)

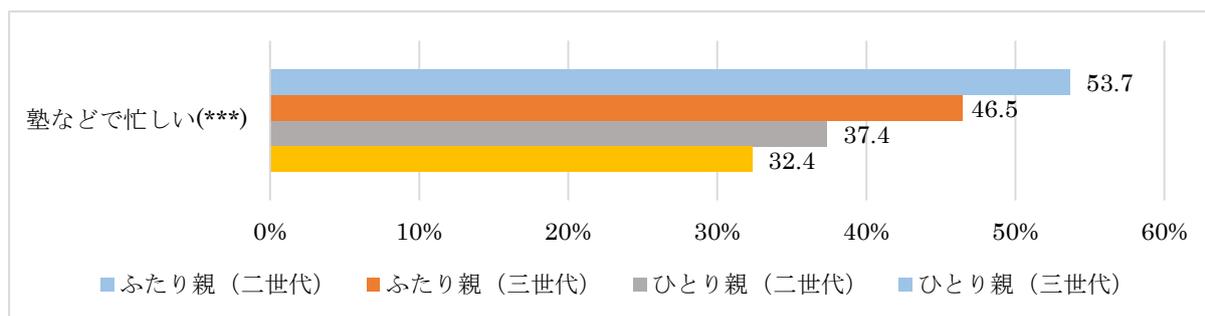


*公立小学校児童のみ集計。

*調査票における「家の事情(家族の世話、家事など)があるから」「塾や習い事、民間の学童クラブが忙しいから」「新 BOP がおもしろくないから」「新 BOP に友だちがいないから」「新 BOP のことを知らないから」を、作表の都合上それぞれ「家の事情」「塾などで忙しい」「おもしろくない」「友だちがいない」「知らない」とした。

世帯タイプ別に見ると、「塾などで忙しい」においてのみ有意な差が見られた。「塾などで忙しい」と回答した割合は、ふたり親(二世帯)世帯、ふたり親(三世帯)世帯でそれぞれ 53.7%、46.5%なのに対し、ひとり親(二世帯)世帯、ひとり親(三世帯)世帯でそれぞれ 37.4%、32.4%となり、ふたり親世帯は「塾や習い事」が新 BOP に参加しない大きな理由となっている。

図表 6-2-13 新 BOP に参加しない理由(小学 5 年生):世帯タイプ別

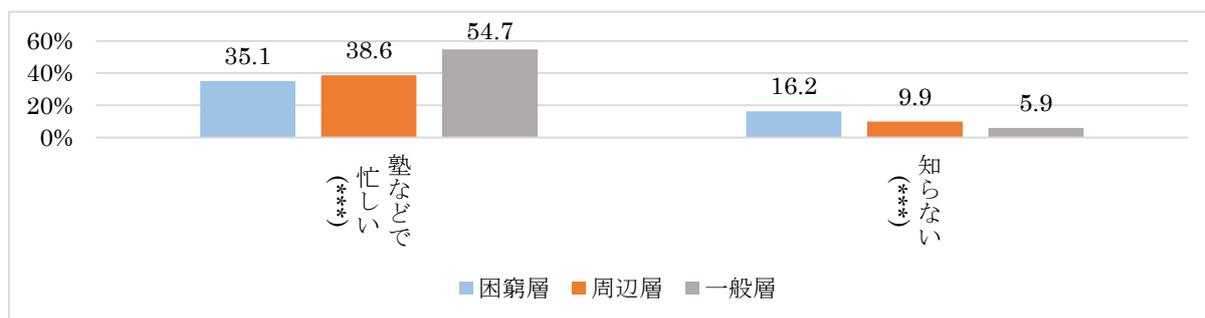


*有意な結果のみ作表。

*公立小学校児童のみ集計。

生活困難度別に見ると、「塾などで忙しい」「知らない」において統計的に有意な差が見られる。「塾などで忙しい」と回答した割合は、困窮層では 35.1%、周辺層では 38.6%、一般層では 54.7% となる。また「知らない」では困窮層 16.2%、周辺層 9.9%、一般層 5.9%となっており、生活困難度が高くなるほど、その割合も高くなる。

図表 6-2-14 新 BOP に参加しない理由(小学 5 年生):生活困難度別

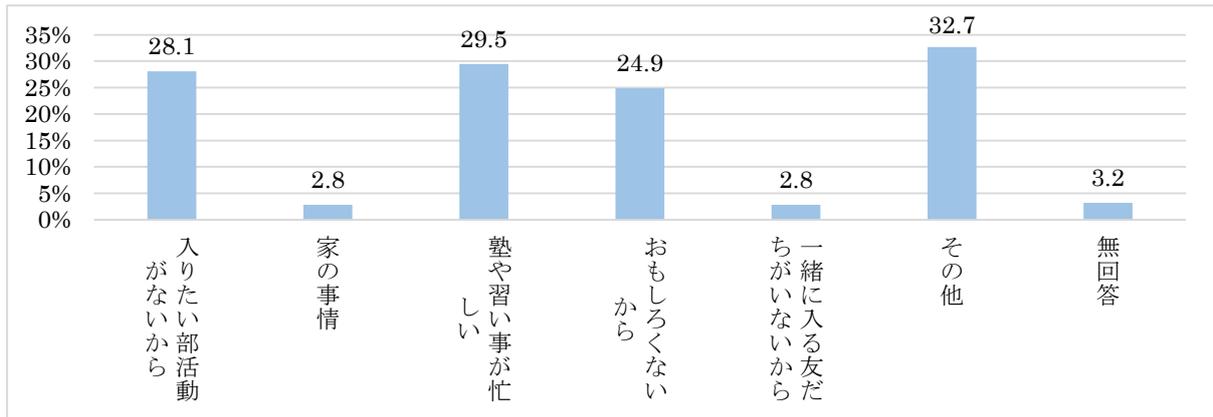


*有意な結果のみ作表。

*公立小学校児童のみ集計。

次に、中学 2 年生が部活動に参加しない理由を見ると、「その他」 32.7%を除くと、最も多かったのが「塾や習い事が忙しい」であり 29.5%、次が「入りたい部活動がないから」で 28.1%、三つ目が「おもしろくないから」 24.9%であった。また、「家の事情」は 2.8%、「一緒に入る友だちがないから」は 2.8%と、若干数ではあるが存在する。なお、中学 2 年生の部活動不参加の理由については、ふたり親 (二世帯) 世帯以外の世帯タイプの n 値が 30 未満だったため、集計していない。

図表 6-2-15 部活動に参加しない理由(中学 2 年生)



*調査票における「家の事情（家族の世話、家事など）があるから」を、作表の都合上「家の事情」とした。

(3) 平日の夜間を一緒に過ごす人・過ごす場所

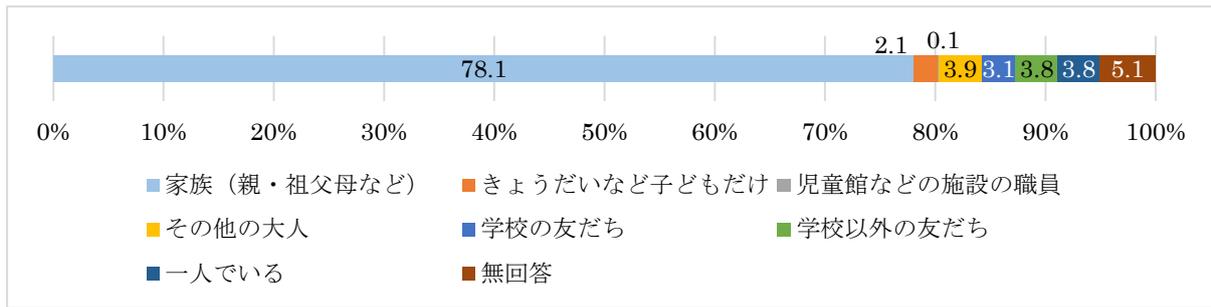
次に、平日の夜間（18 時～20 時）について、子どもたちが誰と過ごしているかを見たところ、小学 5 年生では「家族（親・祖父母など）」が 72.1%、「その他の大人」9.2%と大人と一緒に子どもが 8 割を超えているものの、「きょうだいなど子どもだけ」が 3.9%、「学校の友だち」が 1.0%、「学校以外の友だち」が 3.2%、「一人である」が 1.5%と答えた子どもも 1 割弱存在する。中学 2 年生では「家族（親・祖父母など）」が 78.1%、「きょうだいなど子どもだけ」が 2.1%、「児童館などの施設の職員」が 0.1%、「その他の大人」が 3.9%、「学校の友だち」が 3.1%、「学校以外の友だち」が 3.8%、「一人である」が 3.8%となった。両学年とも大多数が親などの大人と過ごしているが、兄弟姉妹、友人などの子どもだけで過ごしている者も一定程度おり、わずかながら一人で過ごすことが多い者もいる。

図表 6-2-16 平日の夜間に一緒に過ごすことが最も多い人(小学 5 年生)



*調査票における「家族（おじいちゃん・おばあちゃん、親せきなども含みます）」「きょうだい（いとこなど親せきも含みます）」など子ども（17 歳まで）だけである」「その他の大人（近所の大人、塾や習い事、民間の学童クラブの先生など）」「学校以外の友だち（地域のスポーツクラブ、近所の友だちなど）」を、作表の都合上それぞれ「家族（親・祖父母など）」「きょうだいなど子どもだけ」「その他の大人」「学校以外の友だち」とした。以下、同様。

図表 6-2-17 平日の夜間に一緒に過ごすことが最も多い人(中学 2 年生)

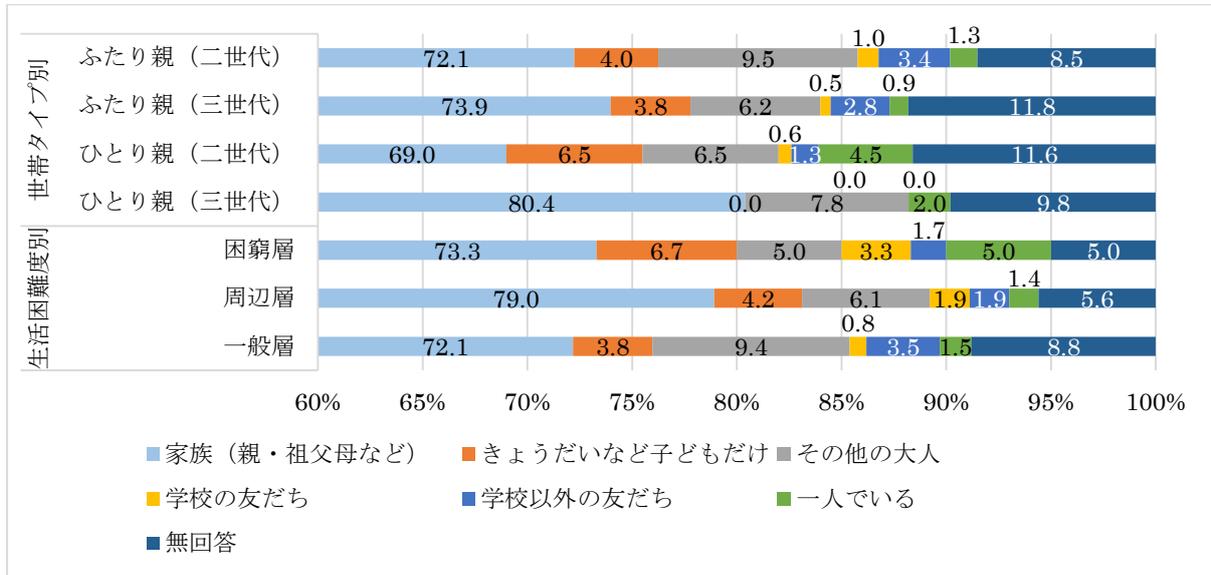


*調査票における「家族（おじいちゃん・おばあちゃん、親せきなども含みます）」「きょうだい（いとこなど親せきも含みます）」など子ども（17歳まで）だけである」「児童館や青少年交流センター、その他の施設の職員」「その他の大人（近所の大人、塾や習い事の先生など）」「学校以外の友だち（地域のスポーツクラブ、近所の友だちなど）」を、作表の都合上それぞれ「家族（親・祖父母など）」「きょうだいなど子どもだけ」「児童館など施設の職員」「その他の大人」「学校以外の友だち」とした。以下同様。

小学 5 年生について世帯タイプ別に見ると、統計的に有意な差が見られる。「家族（親・祖父母など）」と答えた割合はふたり親（二世帯、三世帯）世帯で 73%前後、ひとり親（二世帯）世帯で 69.0%となるが、ひとり親（三世帯）世帯は 80.4%となった。その割合は、ふたり親世帯では全体とほぼ同様なのに対し、ひとり親（二世帯）世帯では全体よりも低く、ひとり親（三世帯）世帯では全体よりも高くなり、同居形態が影響している。また「一人である」と回答した割合はふたり親世帯（二世帯、三世帯）ではそれぞれ 1.3%、0.9%であるが、ひとり親（二世帯、三世帯）世帯ではそれぞれ 4.5%、2.0%と、ひとり親世帯の方が一人で過ごす割合は高い。

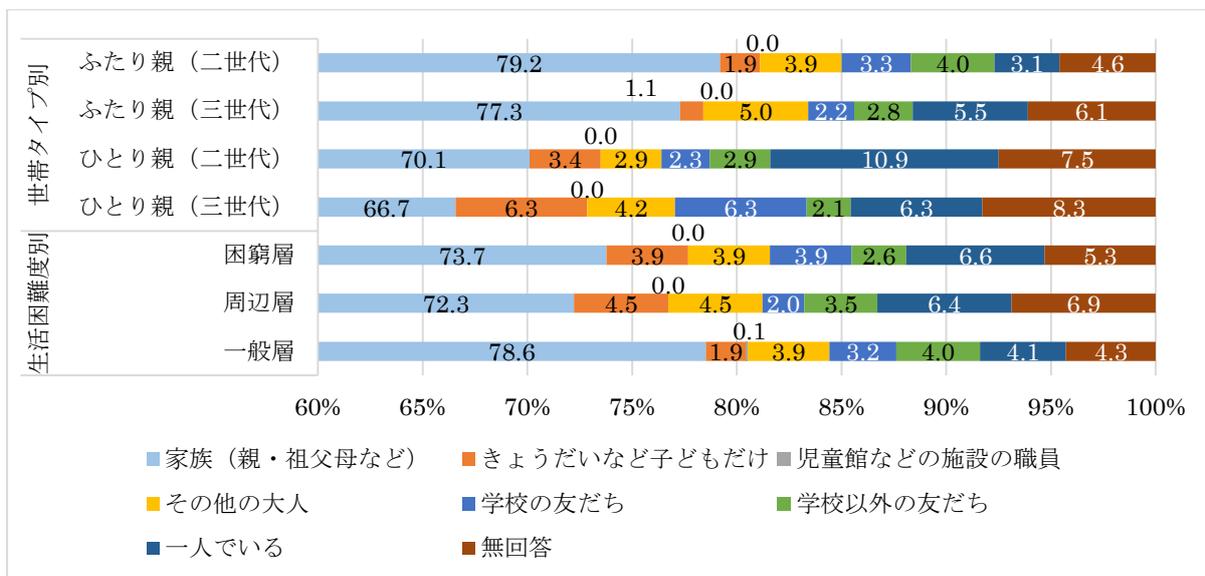
また生活困難度別についても、統計的に有意な差が見られた。「家族（親・祖父母など）」については、困窮層 73.3%、周辺層 79.0%、一般層 72.1%となり、一般層よりも周辺層、困窮層の方がその割合は高い。「きょうだいなど子どもだけ」については、困窮層 6.7%、周辺層 4.2%、一般層 3.8%であり、生活困難度が上がるほど割合が高くなる傾向にある。「その他の大人」と過ごす割合は全体で 9.2%と「家族（親・祖父母など）」に次ぐが、困窮層では 5.0%、一般層で 9.4%となる。「学校の友だち」の割合を見ると、困窮層 3.3%、周辺層 1.9%、一般層 0.8%となる。「学校以外の友だち」では困窮層 1.7%、周辺層 1.9%、一般層 3.5%となり、困窮層は学校の友だちとは頻繁に過ごすものの「学校以外の友だち」とは過ごしておらず、逆に一般層では「学校の友だち」よりも「学校以外の友だち」とより頻繁にすごしている。「一人である」割合が最も高いのは困窮層で 5.0%となった。

図表 6-2-18 平日の夜間に一緒に過ごすことが最も多い人(小学 5 年生):世帯タイプ別(*)、生活困難度別(*)



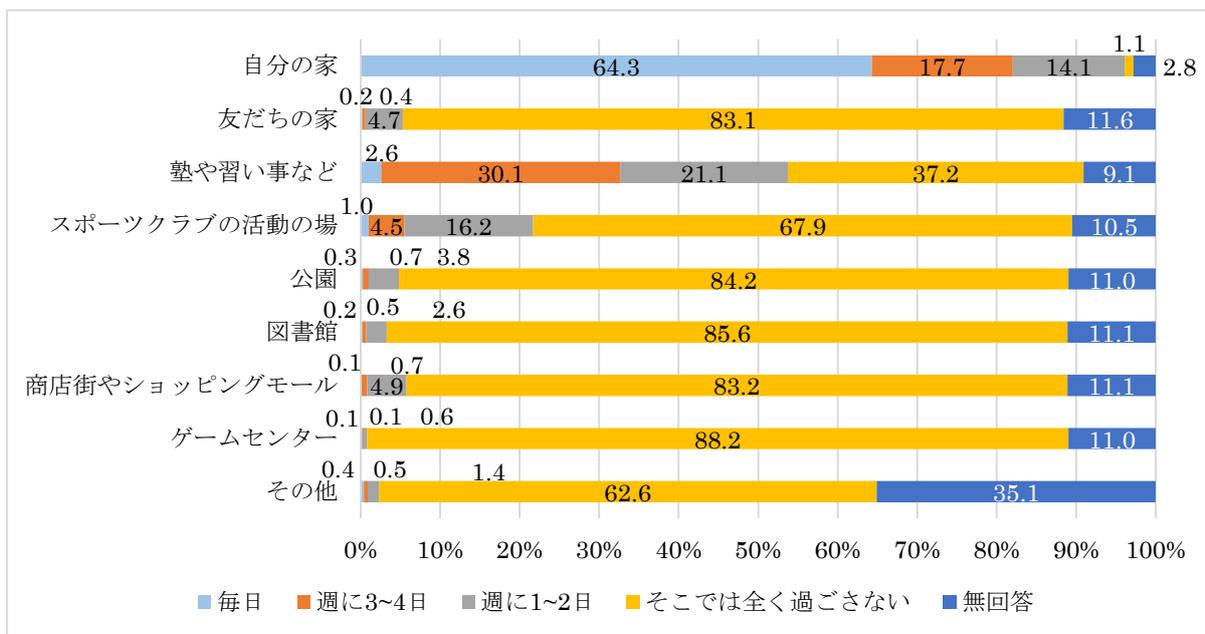
次に、中学 2 年生についてこの割合を世帯タイプ別、生活困難度別に見ると、世帯タイプ別においてのみ統計的に有意な差が見られた。「家族(親・祖父母など)」と一緒に過ごしている割合は、ふたり親(二世代)世帯で 79.2%、ふたり親(三世代)世帯で 77.3%、ひとり親(二世代)世帯で 70.1%、ひとり親(三世代)世帯で 66.7%と、ふたり親世帯よりもひとり親世帯で低くなる。また三世代世帯よりも二世代世帯の方が高い傾向となっている。「その他の大人」は、ふたり親(二世代) 3.9%、ふたり親(三世代) 5.0%、ひとり親(二世代) 2.9%、ひとり親(三世代) 4.2%となり、こちらは「家族(親・祖父母など)」とは逆に三世代世帯の方が高い割合となる。「きょうだいなど子どもだけ」などと過ごす割合はふたり親(二世代、三世代)世帯で 1.9%、1.1%なのに対し、ひとり親(二世代、三世代)世帯では 3.4%、6.3%と、ひとり親世帯の方が高い割合となった。同様に「一人である」割合も、ふたり親(二世代、三世代)世帯では 3.1%、5.5%であるのに対し、ひとり親(二世代、三世代)世帯では 10.9%、6.3%と、ひとり親世帯の方が高く、特に、ひとり親(二世代)世帯は高い割合となっている。「児童館などの施設の職員」とは、どの世帯タイプの子どものほとんど平日の夜間を一緒に過ごしていない。

図表 6-2-19 平日の夜間に一緒に過ごすことが最も多い人(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(X)



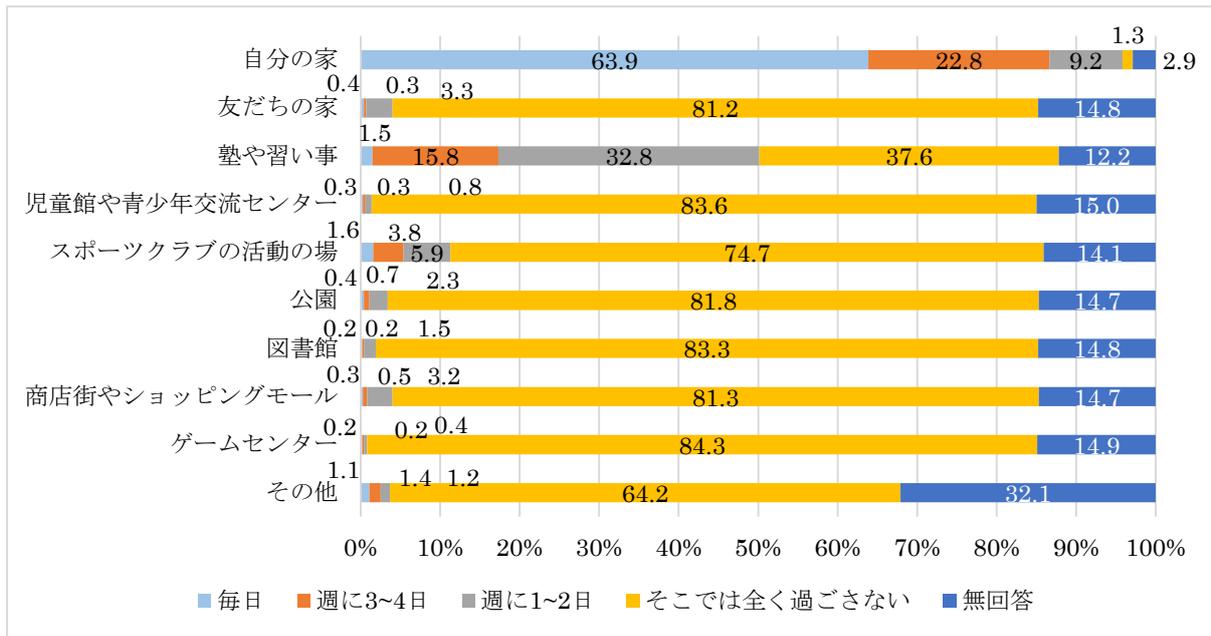
平日の夜間(18時~20時)に過ごす場所については、小学5年生では、平日3~4日以上(「毎日」「週に3~4日」)夜間に過ごす場所は、「自分の家」が一番多く82.0%、次に「塾や習い事など」32.7%、「スポーツクラブの活動の場」5.5%と続く。中学2年生で週に3~4日以上過ごす場所は「自分の家」が最も割合が高く86.7%、次いで「塾や習い事など」17.3%、「スポーツクラブの活動の場」と続く。

図表 6-2-20 平日の夜間に過ごす場所(小学 5 年生)



*調査票における「塾や習い事(スポーツはのぞく)、民間の学童クラブ」「スポーツクラブの活動の場(野球場、サッカー場など)」を、作表の都合上それぞれ「塾や習い事など」「スポーツクラブの活動の場」とした。

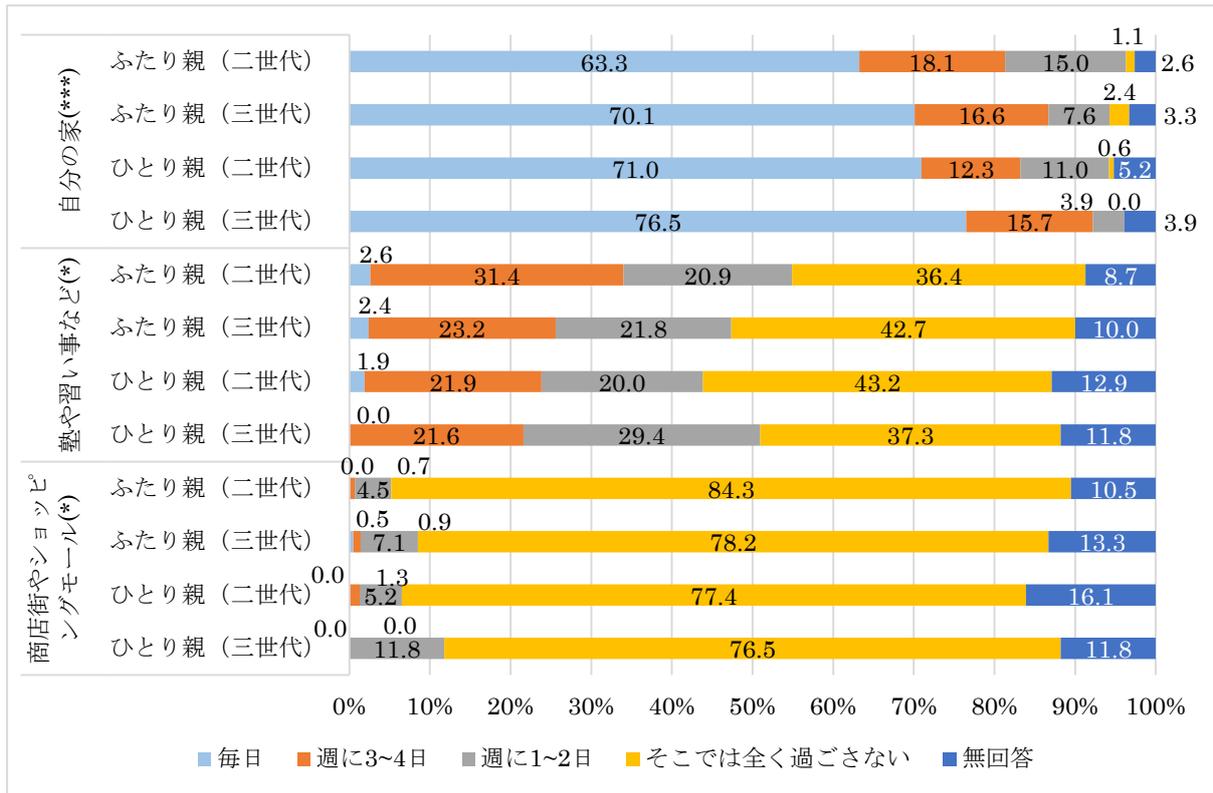
図表 6-2-21 平日の夜間に過ごす場所(中学 2 年生)



小学 5 年生について、この割合を世帯タイプ別に見ると「自分の家」「塾や習い事など」「商店街やショッピングモール」で統計的に有意な差が見られた。「自分の家」で週に 3~4 日以上過ごす割合はふたり親（二世帯）世帯で 81.4%、ひとり親（二世帯）世帯で 83.3%なのに対し、ふたり親（三世帯）世帯で 86.7%、ひとり親（三世帯）世帯で 92.2%と二世帯世帯より三世帯世帯の方が高くなる傾向にある。これを毎日過ごす割合に限った場合で見ると、ふたり親世帯よりもひとり親世帯の方が自宅で過ごす割合は高くなる。「塾や習い事など」で週に 3~4 日以上過ごす割合はふたり親（二世帯）世帯で 34.0%、ふたり親（三世帯）世帯で 25.6%、ひとり親（二世帯）世帯で 23.8%、ひとり親（三世帯）世帯で 21.6%となり、ふたり親（二世帯）世帯のこどもの割合が高い。「商店街やショッピングモール」で週に 1~2 日以上過ごす割合はふたり親（二世帯）世帯で 5.2%、ひとり親（二世帯）世帯で 6.5%、ふたり親（三世帯）世帯で 8.5%、ひとり親（三世帯）世帯で 11.8%となり三世帯世帯の割合が高くなる傾向にある。ひとり親（三世帯）世帯は「自分の家」で過ごす割合が高いが、「商店街やショッピングモール」で過ごす割合も高い。

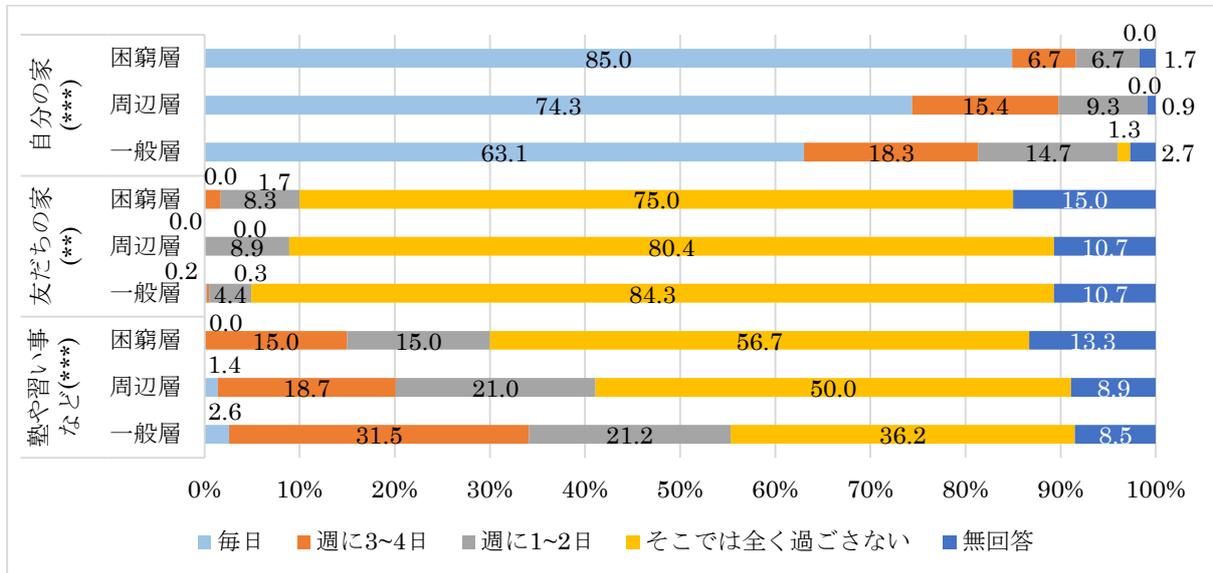
生活困難度別に見ると、「自分の家」「友だちの家」「塾や習い事など」で統計的に有意な差が見られた。「自分の家」で毎日過ごす割合は困窮層で 85.0%、周辺層で 74.3%、一般層で 63.1%と、生活困難度が上がるほど高くなる傾向が見られた。「友だちの家」では「そこでは全く過ごさない」割合は困窮層で 75.0%、周辺層 80.4%、一般層 84.3%となり生活困難度が上がるほど友だちの家にいる傾向が見られる。「塾や習い事など」については、全く過ごさない割合は困窮層で 56.7%、周辺層 50.0%、一般層 36.2%と生活困難度が上がるほど高くなる。生活困難度の高さから有料の「塾や習い事など」ではなく自宅や友だちの家で過ごしている傾向が見られるが、困窮層においても 3 割が週に 1~2 日以上、平日の夜間に塾や習い事に通っている。

図表 6-2-22 平日の夜間に過ごす場所(小学 5 年生):世帯タイプ別



*有意な結果のみ作表。

図表 6-2-23 平日の夜間に過ごす場所(小学 5 年生):生活困難度別

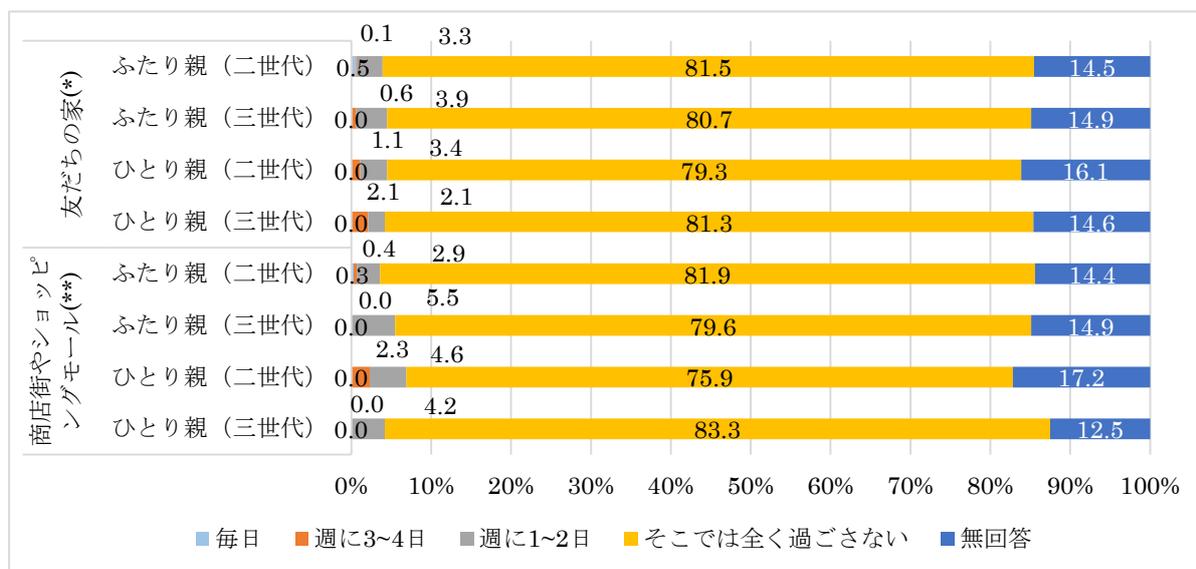


*有意な結果のみ作表。

中学 2 年生について、この割合を世帯タイプ別に見ると、「友だちの家」「商店街やショッピングモール」で統計的に有意な差が見られた。「友だちの家」で過ごす割合については、どの世帯タイプの子どもの多くないが、週 3~4 日以上は、ひとり親 (三世帯) 世帯が 2.1%と若干見

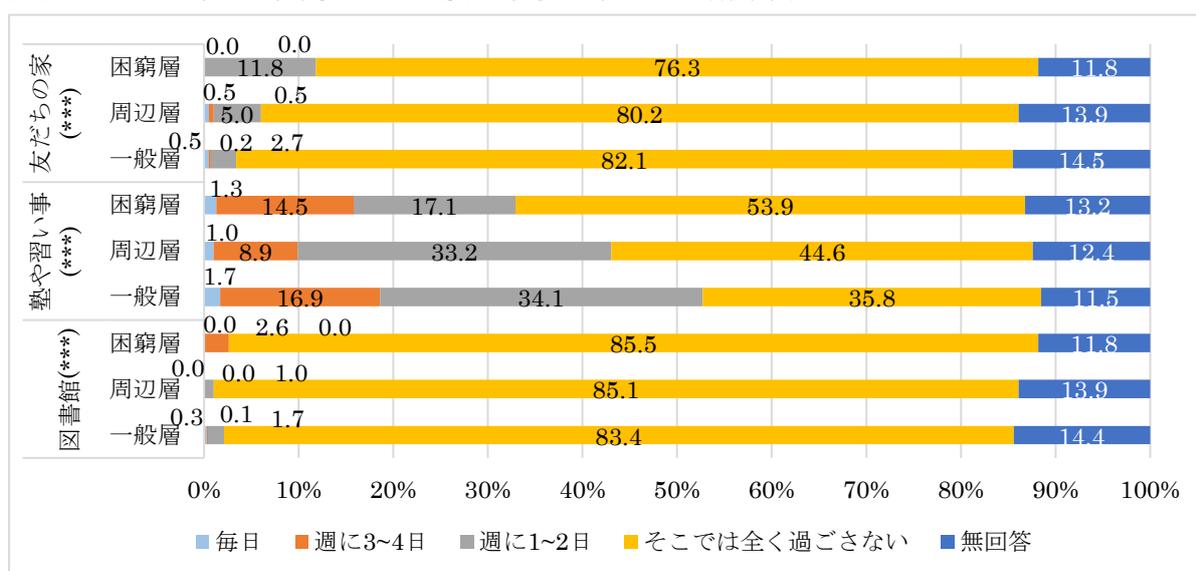
られる。「商店街やショッピングモール」も同様に、どの世帯タイプの子どもも「全く過ごさない」が大多数であるが、ひとり親（二世帯）世帯にて2.3%が「週に3~4日」、4.6%が「週に1~2日」となっている。生活困難度別に見ると、「友だちの家」「塾や習い事など」「図書館」で統計的に有意な差が見られた。「友だちの家」では週に1~2日以上過ごす割合は困窮層で11.8%、周辺層で6.0%、一般層で3.4%となっている。「塾や習い事など」に週1~2日以上行っている割合は困窮層で32.9%、周辺層で43.1%、一般層で52.7%となり、生活困難度が上がるほど低くなる。「図書館」は、どの層においても「全く過ごさない」子どもが大多数となっているものの、困窮層では若干「週に3~4日」過ごす子どもが見られた。

図表 6-2-24 平日の夜間に過ごす場所(中学2年生):世帯タイプ別



*有意な結果のみ作表。

図表 6-2-25 平日の夜間に過ごす場所(中学2年生):生活困難度別

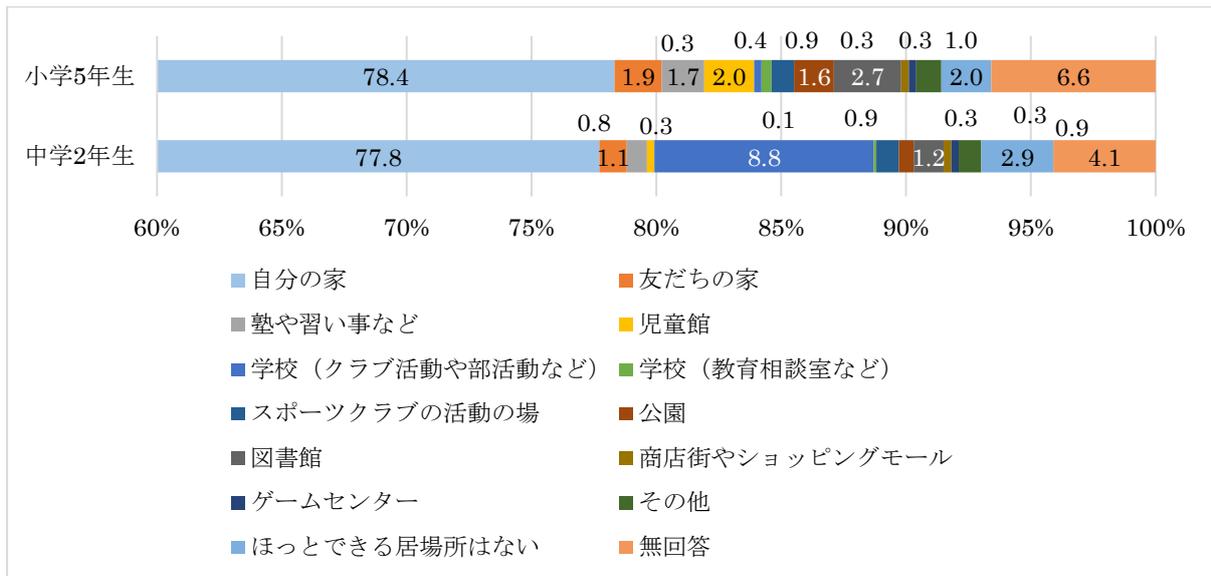


*有意な結果のみ作表。

(4) ほっとできる居場所

放課後に「一番ほっとできる居場所」について子どもに尋ねたところ、両学年とも「自分の家」と答えた子どもの割合が最も高く、8割弱となっている。二番目に高くあげられた居場所は、小学5年生については多様であり、「図書館」2.7%、「児童館」2.0%、「友だちの家」1.9%などがあげられている。中学2年生については、「学校（クラブ活動や部活動など）」が8.8%と、他の選択肢より大幅に多くなっている。一方で、「ほっとできる居場所はない」と答えた子どもの割合は、小学5年生は2.0%、中学2年生では2.9%であった。

図表 6-2-26 放課後ほっとできる居場所(小学5年生、中学2年生)



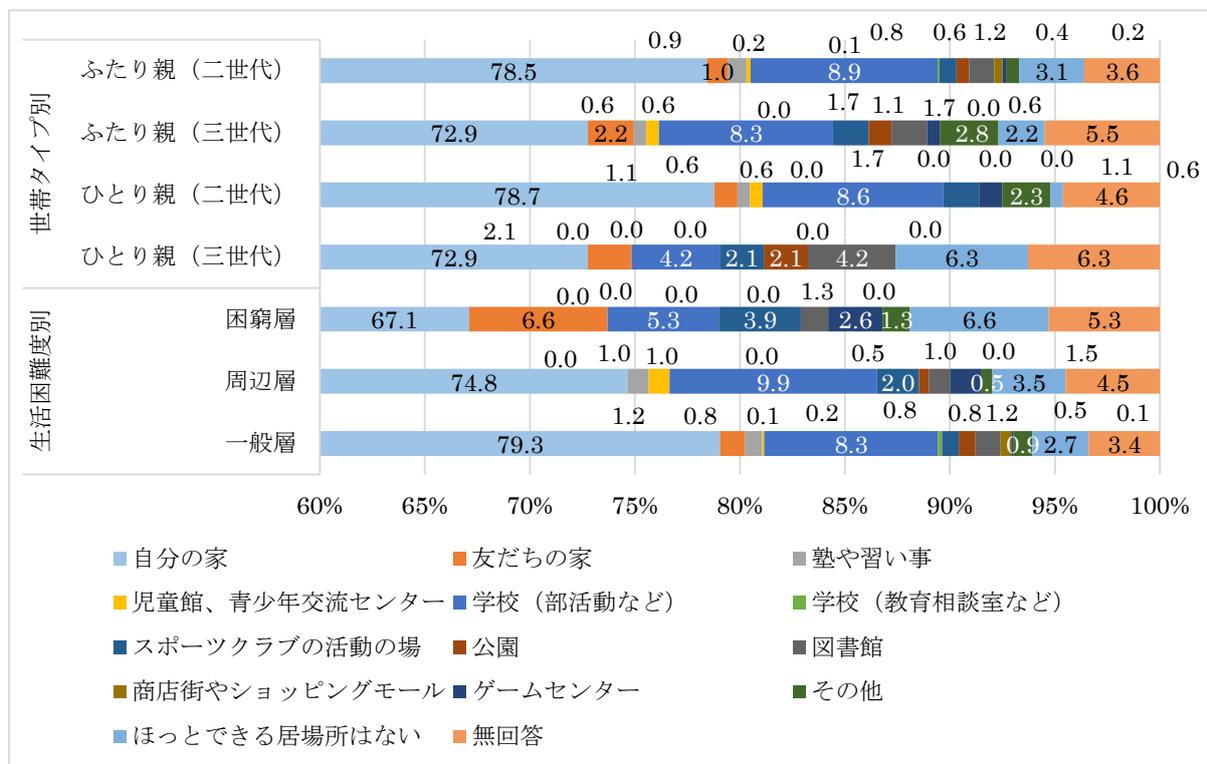
*調査票における「学校（教育相談室、保健室）」「スポーツクラブの活動の場（野球場、サッカー場など）」を、作表の都合上それぞれ「塾や習い事など」「学校（教育相談室など）」「スポーツクラブの活動の場」とした。また、小学5年生での「塾や習い事（スポーツはのぞく、民間の学童クラブ）」「学校（クラブ活動、新 BOP（区立小学校で行っている放課後の遊び場のこと）など）」と中学2年生での「塾や習い事（スポーツはのぞく）」「学校（部活動など）」をそれぞれ「塾や習い事など」「学校（クラブ活動や部活動など）」とした。以下、同様。

「ほっとできる居場所」の割合を世帯タイプ別、生活困難度別に見たところ、小学5年生ではいずれにおいても統計的に有意な差は確認されなかった。一方、中学2年生においては、世帯タイプ別、生活困難度別ともに有意な差があった。いずれの世帯タイプにおいても「自分の家」と答えた子どもが最も多いが、その割合は、ふたり親（二世帯）世帯 78.5%、ふたり親（三世帯）世帯 72.9%、ひとり親（二世帯）世帯 78.7%、ひとり親（三世帯）世帯 72.9%と、三世帯世帯において二世帯世帯よりも若干低くなっている。また、「学校（クラブ活動や部活動など）」では、ふたり親（二世帯、三世帯）世帯、ひとり親（二世帯）世帯では 8.3~8.9%なのに対し、ひとり親（三世帯）世帯では 4.2%となっている。そして、「ほっとできる居場所はない」の割合は、ひとり親（三世帯）世帯が 6.3%と、他の世帯タイプよりも高い。

生活困難度別に見ると、「自分の家」と回答した割合は一般層で 79.3%なのに対し、周辺層 74.8%、困窮層 67.1%と生活困難度が上がるにつれて、低下する。また、「ほっとできる居場所はない」も

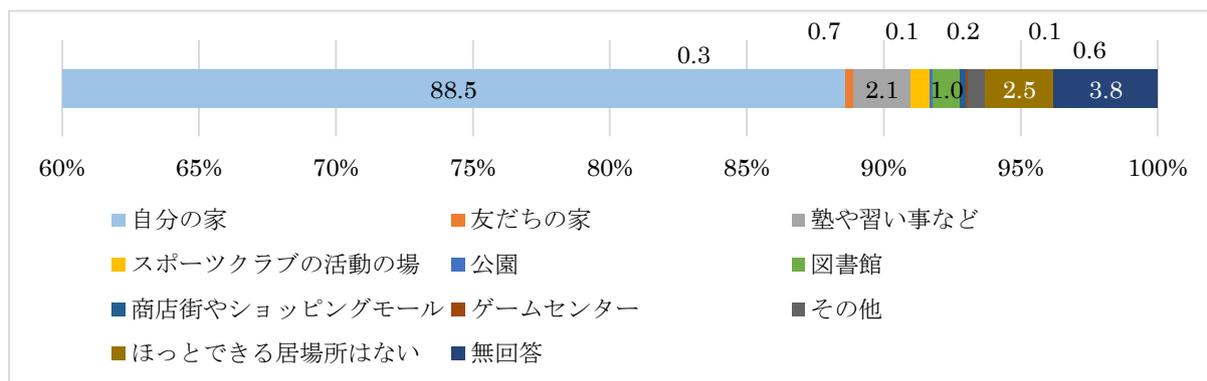
一般層では 2.7%なのに対し、周辺層 3.5%、困窮層 6.6%であった。

図表 6-2-27 放課後に一番ほっとできる居場所(中学 2 年生):世帯タイプ別(*)、生活困難度別(***)



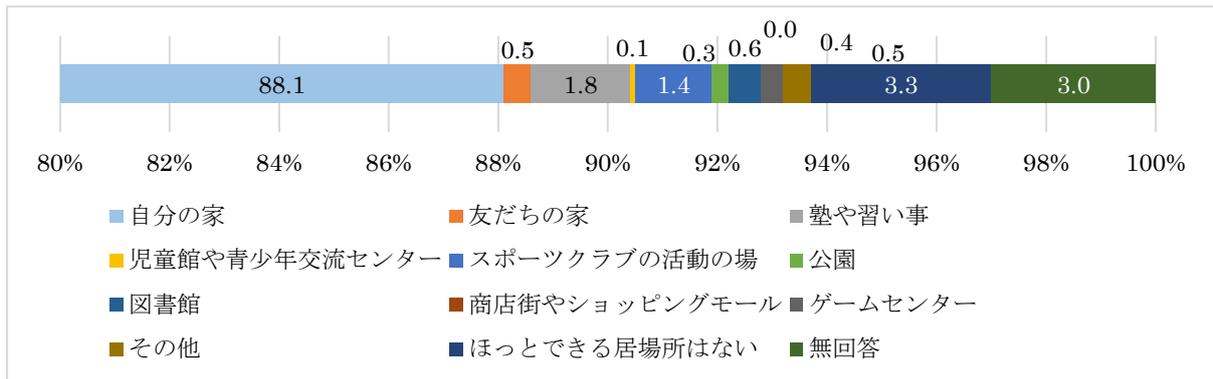
次に、夜間に一番ほっとできる居場所について聞いたところ、両学年とも「自分の家」と回答した子どもの割合が最も高く、9割弱であった。また、「ほっとできる居場所はない」と回答した子どもの割合は、小学 5 年生で 2.5%、中学 2 年生では 3.3%であった。

図表 6-2-28 夜間に一番ほっとできる居場所(小学 5 年生)



*調査票における「塾や習い事 (スポーツはのぞく)、民間の学童クラブ」「スポーツクラブの活動の場 (野球場、サッカー場など)」を、作表の都合上それぞれ「塾や習い事など」「スポーツクラブの活動の場」とした。

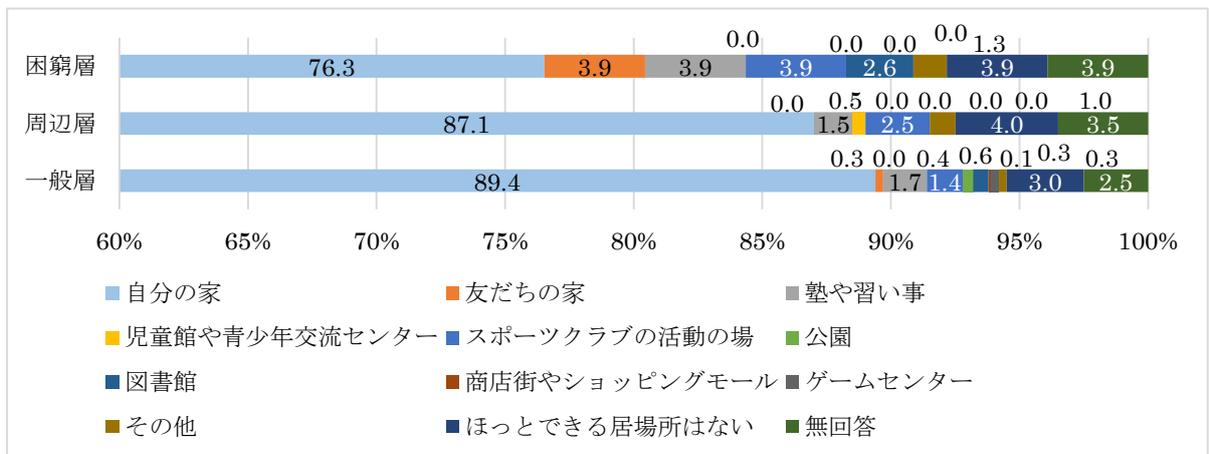
図表 6-2-29 夜間に一番ほっとできる居場所(中学 2 年生)



*調査票における「塾や習い事 (スポーツはのぞく)」「スポーツクラブの活動の場 (野球場、サッカー場など)」を、作表の都合上それぞれ「塾や習い事」「スポーツクラブの活動の場」とした。

この割合を世帯タイプ別、生活困難度別に見たところ、小学 5 年生においては、いずれにおいても統計的に有意な差は確認されなかった。中学 2 年生においては、生活困難度別に見た場合のみ、統計的に有意な差が確認された。「自分の家」と回答した子どもの割合は一般層では 89.4%なのに対し、周辺層 87.1%、困窮層では 76.3%であった。ただし、「ほっとできる居場所はない」の割合には生活困難度による違いは確認されていない。

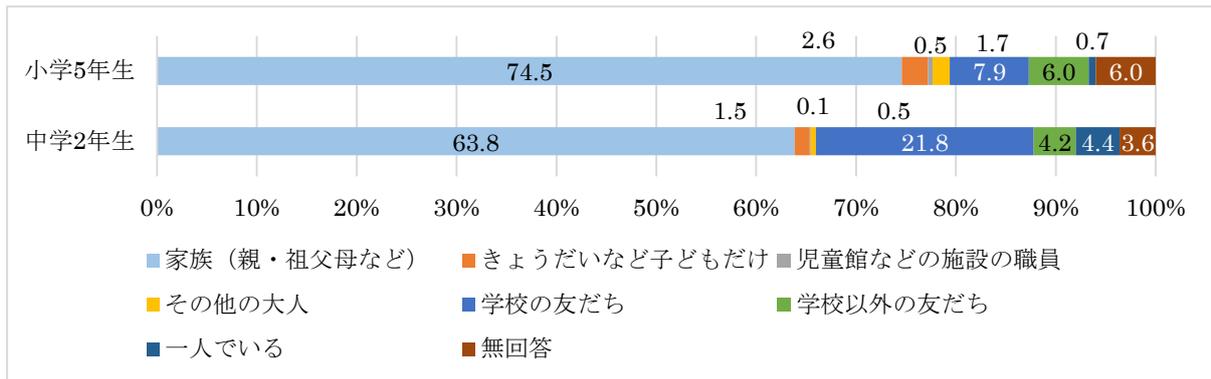
図表 6-2-30 夜間にほっとできる居場所(中学 2 年生):生活困難度別(***)



(5) 休日の過ごし方

次に、休日の午後に誰と一緒に過ごすかを子ども本人に聞いたところ、両学年とも「家族 (親・祖父母など)」と回答した子どもの割合が最も高く、小学 5 年生では 74.5%、中学 2 年生では 63.8%であった。また、「一人でのいる」と回答した子どもの割合は、小学 5 年生では 0.7%と極めて少なかったが、中学 2 年生では 4.4%であった。また、「学校の友だち」も小学 5 年生 7.9%に対し、中学 2 年生 21.8%と学年による違いがあった。

図表 6-2-31 休日の午後に一緒に過ごすことが最も多い人(小学5年生、中学2年生)

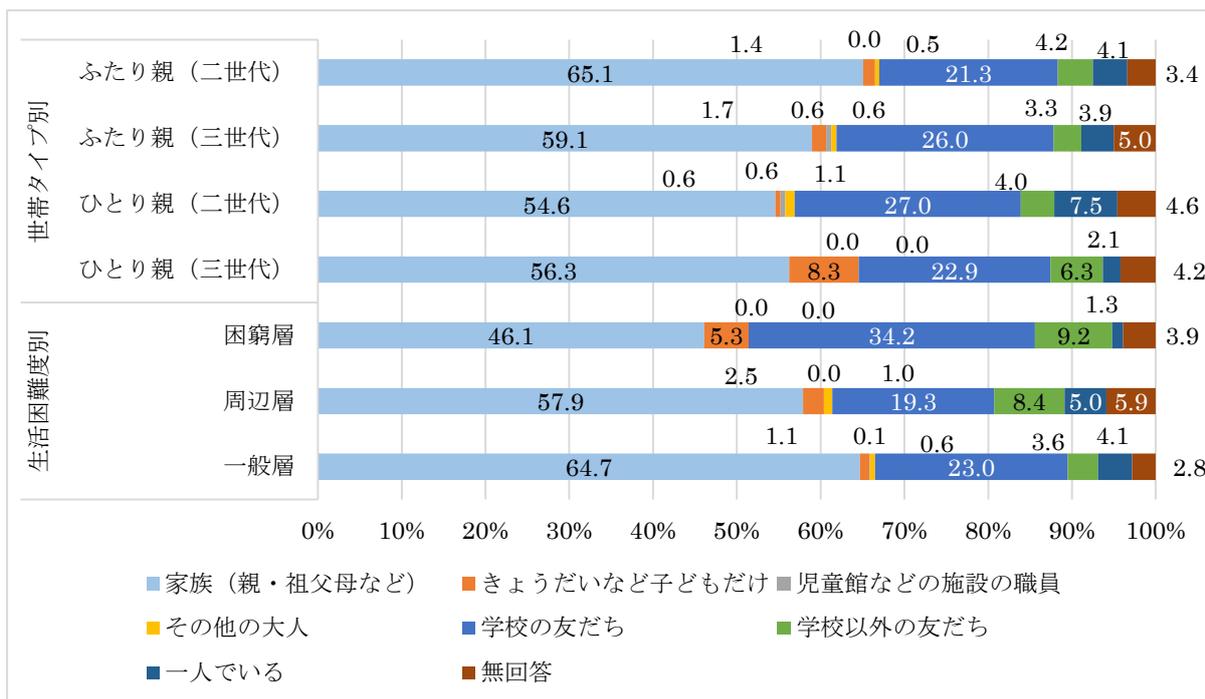


*調査票における「家族(おじいちゃん・おばあちゃん、親せきなども含みます)」「きょうだい(いとこなど親せきも含みます)など子ども(17歳まで)だけである」「その他の大人(近所の大人、塾や習い事、民間の学童クラブの先生など)」「学校以外の友だち(地域のスポーツクラブ、近所の友だちなど)」を、作表の都合上それぞれ「家族」「きょうだいなど子どもだけ」「その他の大人」「学校以外の友だち」とした。また、小学5年生での「児童館、新BOP(区立小学校に通っている人)、その他の施設の職員」と中学2年生での「児童館、青少年交流センター、その他の施設の職員」を「児童館などの施設の職員」とした。

この割合を世帯タイプ別、生活困難度別に見ると、小学5年生では有意な差が見られず、中学2年生においてのみ有意な差が確認された。世帯タイプ別に見ると、「家族(親・祖父母など)」と過ごす割合は、ふたり親(二世帯)世帯65.1%、ふたり親(三世帯)世帯59.1%、ひとり親(二世帯)世帯54.6%、ひとり親(三世帯)世帯56.3%であり、ひとり親世帯において低くなる傾向がある。さらに、「学校の友だち」と過ごす割合は、ふたり親(二世帯)世帯21.3%、ふたり親(三世帯)世帯26.0%、ひとり親(二世帯)世帯27.0%、ひとり親(三世帯)世帯22.9%である。ふたり親(三世帯)世帯とひとり親(二世帯)世帯の子どもは、ふたり親(二世帯)世帯ほどには「家族(親・祖父母など)」と過ごしていない分、「学校の友だち」と過ごしていると考えられる。他方、ひとり親(三世帯)世帯の子どもは、その分「きょうだいなど子どもだけ」で過ごす割合が相対的に高い(8.3%)。

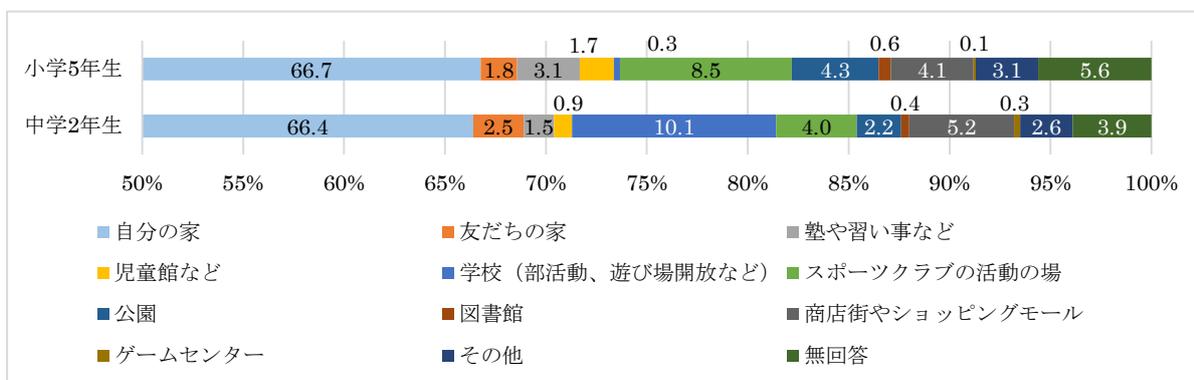
生活困難度別に見ると、「家族(親・祖父母など)」と一緒に過ごす割合は、一般層で64.7%なのに対し、周辺層57.9%、困窮層46.1%と生活困難度が上がるほど下がる。反対に「きょうだいなど子どもだけ」と過ごす割合は、困窮層では5.3%となるのに対し、周辺層で2.5%、一般層で1.1%となり、生活困難度に連動して高くなる。「学校の友だち」の割合を見ると、一般層は全体の割合と近い23.0%であるのに対し、困窮層34.2%と高くなる。また「学校以外の友だち」では一般層3.6%に対して周辺層8.4%、困窮層9.2%となった。「一人である」割合は一般層で4.1%なのに対して困窮層1.3%である。中学2年生の周辺層、困窮層においては、「家族(親・祖父母など)」と過ごさない分、兄弟姉妹や友人など子どもだけで過ごしている子どもの割合が、一般層よりも高い傾向がある。

図表 6-2-32 休日の午後に一緒に過ごすことが最も多い人(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



休日の午後どこで過ごすかについては、小学 5 年生では「自分の家」が 66.7%と圧倒的に多く、次に、「スポーツクラブの活動の場」8.5%、「公園」4.3%、「商店街やショッピングモール」4.1%、「塾や習い事」3.1%となっている。また、若干ではあるが、「友だちの家」1.8%、「児童館・新BOP」1.7%、「図書館」0.6%、「学校(遊び場開放など)」0.3%、「ゲームセンター」0.1%、「その他」3.1%などがあげられた。中学 2 年生においても、「自分の家」が 66.4%と最も多く、次に、「学校(部活動、遊び場開放など)」10.1%、「スポーツクラブの活動の場」4.0%、「商店街やショッピングモール」5.2%があがっている。また、「友だちの家」2.5%、「公園」2.2%、「塾や習い事」1.5%、「児童館、青少年交流センター」0.9%、「図書館」0.4%、「ゲームセンター」0.3%、「その他」2.6%などの回答も見られた。

図表 6-2-33 休日の午後に過ごす場所(小学 5 年生、中学 2 年生)



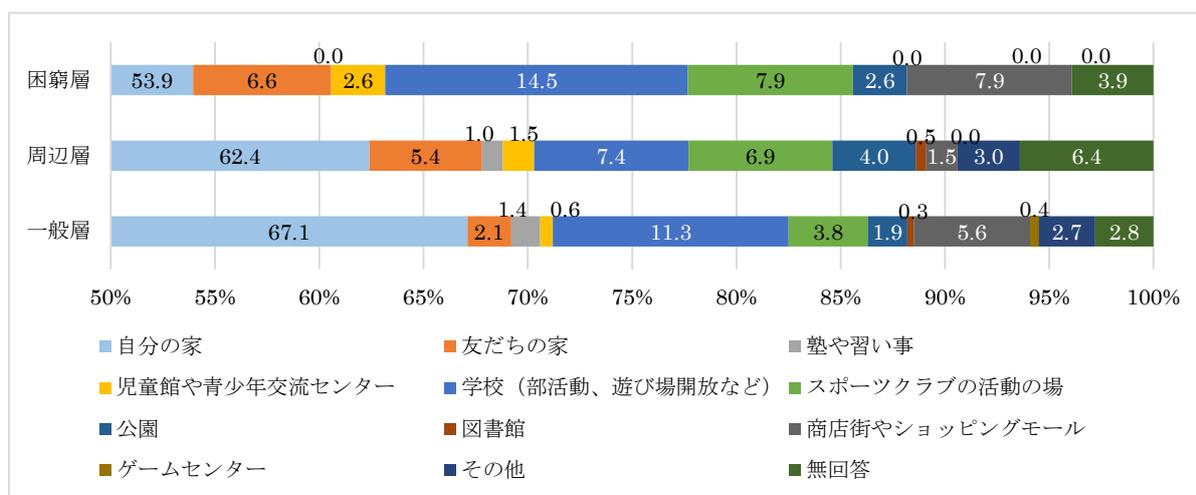
*調査票における「スポーツクラブの活動の場(野球場、サッカー場など)」を、作表の都合上それぞれ「塾や習い事など」「ス

スポーツクラブの活動の場」とした。また、小学5年生での「塾や習い事（スポーツはのぞく）、民間の学童クラブ」「児童館・新BOP」「学校（遊び場開放など）」と中学2年生での「塾や習い事（スポーツはのぞく）」「児童館や青少年交流センター」「学校（部活動、遊び場開放など）」をそれぞれ「塾や習い事など」「児童館など」「学校（部活動、遊び場開放など）」とした。

小学5年生において、この割合を世帯タイプ別、生活困難度別に見ると、いずれも統計的に有意な差はなかった。世帯タイプ別において「自分の家」の割合はいずれの層でも高くふたり親（二世帯、三世帯）世帯でそれぞれ67.1%、64.5%、ひとり親（二世帯、三世帯）世帯ではそれぞれ71.6%、54.9%となる。次に高いのは「スポーツクラブの活動の場」で、ふたり親（二世帯、三世帯）世帯でそれぞれ8.8%、7.6%、ひとり親（二世帯、三世帯）世帯ではそれぞれ3.9%、7.8%となる。生活困難度別では、一般層、周辺層でのトップ3の順位は全体と同様となるが、困窮層では「自分の家」53.3%、「スポーツクラブの活動の場」8.3%、「商店街やショッピングモール」6.7%となる（図表省略）。

中学2年生においても、世帯タイプ別に見ると、統計的に有意な差は見られない（図表省略）。一方、生活困難度別に見ると、統計的に有意な差が見られた。「自分の家」はいずれの層でも最も高い回答であるが一般層では67.1%なのに対し、周辺層62.4%、困窮層では53.9%と生活困難度が高いほど自宅では過ごさない傾向がある。逆に、「学校（部活動、遊び場開放など）」では困窮層14.5%、周辺層7.4%、一般層11.3%となっており、困窮層にて「学校（部活動、遊び場開放など）」で過ごしている割合が相対的に高い。同様に「友だちの家」の割合は一般層2.1%に対して、困窮層では6.6%となっている。また、「児童館など」では一般層0.6%に対し、周辺層1.5%、困窮層2.6%となる。「スポーツクラブの活動の場」では一般層3.8%に対し、周辺層6.9%、困窮層7.9%となる。「商店街やショッピングモール」では一般層5.6%、周辺層1.5%、困窮層7.9%となる。困窮層では自分の家で過ごさないかわりに学校やスポーツクラブ、友だちの家、商店街などで過ごしている子どもの割合が高いことが読み取れる。

図表 6-2-34 休日の午後に過ごす場所(中学2年生):生活困難度別(***)

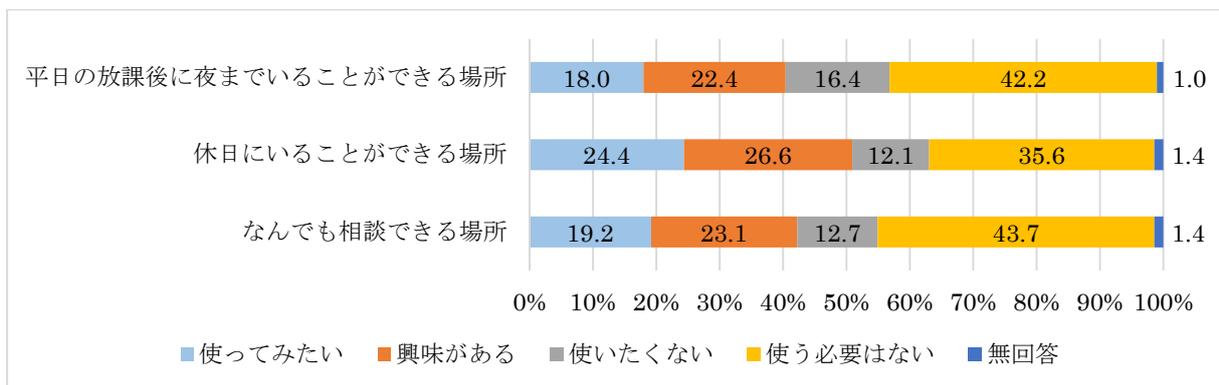


*調査票における「塾や習い事（スポーツはのぞく）」「スポーツクラブの活動の場（野球場、サッカー場など）」を、作表の都合上それぞれ「塾や習い事」「スポーツクラブの活動の場」とした。

3. 居場所事業等の利用意向

次に、2つの居場所事業（「平日の放課後に夜までいることができる場所」「休日にいることができる場所」と相談事業（「なんでも相談できる場所」）について子ども自身の利用意向を聞いた。すると、小学5年生では、18.0%が「平日の放課後に夜までいることができる場所」を、24.4%が「休日にいることができる場所」を、19.2%が「なんでも相談できる場所」を「使ってみたい」と回答している。「興味がある」を含めると、どの事業も4割以上の子どもに利用意向があり、特に、「休日にいることができる場所」については3つの事業の中で利用意向を示した子どもの割合が最も高く、半数以上となっている。

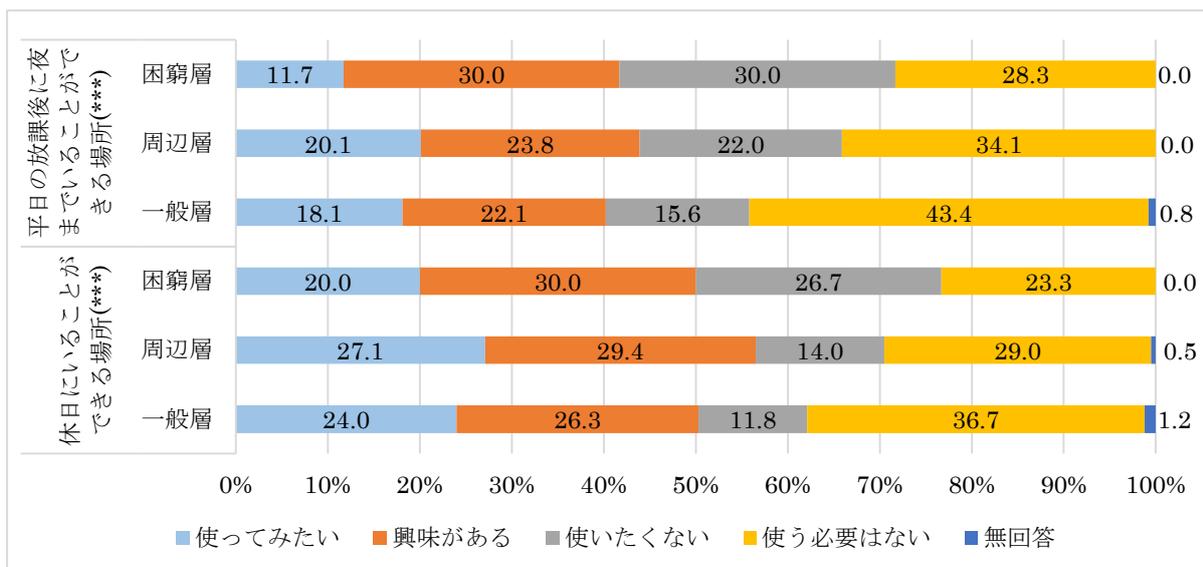
図表 6-3-1 居場所事業等の利用意向(小学5年生)



この割合を世帯タイプ別に見ると統計的に有意な差は見られなかった。「平日の放課後に夜までいることができる場所」に興味を示している割合は「使ってみたい」「興味がある」を合わせると、ふたり親（二世帯）世帯で39.9%、ふたり親（三世帯）世帯で41.7%、ひとり親（二世帯）世帯で43.2%、ふたり親（三世帯）世帯で43.2%となる。「休日にいることができる場所」では「使ってみたい」「興味がある」を合わせた割合は、ふたり親（二世帯）世帯で51.1%、ふたり親（三世帯）世帯で54.0%、ひとり親（二世帯）世帯で52.3%、ふたり親（三世帯）世帯で58.8%となる。「なんでも相談できる場所」では「使ってみたい」「興味がある」を合わせた割合は、ふたり親（二世帯）世帯で42.2%、ふたり親（三世帯）世帯で42.1%、ひとり親（二世帯）世帯で41.3%、ふたり親（三世帯）世帯で37.3%となる（図表省略）。

生活困難度別では、「平日の放課後に夜までいることができる場所」「休日にいることができる場所」において、統計的に有意な差が見られた。「平日の放課後に夜までいることができる場所」を「使ってみたい」と回答した割合は困窮層で11.7%、周辺層で20.1%、一般層で18.1%となっている。困窮層にて、「使ってみたい」割合が低くなっているが、「興味がある」と答えた割合は高く、二つを合わせると大きな差はない。「休日にいることができる場所」においては、「使ってみたい」「興味がある」の両者ともに周辺層で最も割合が高い。

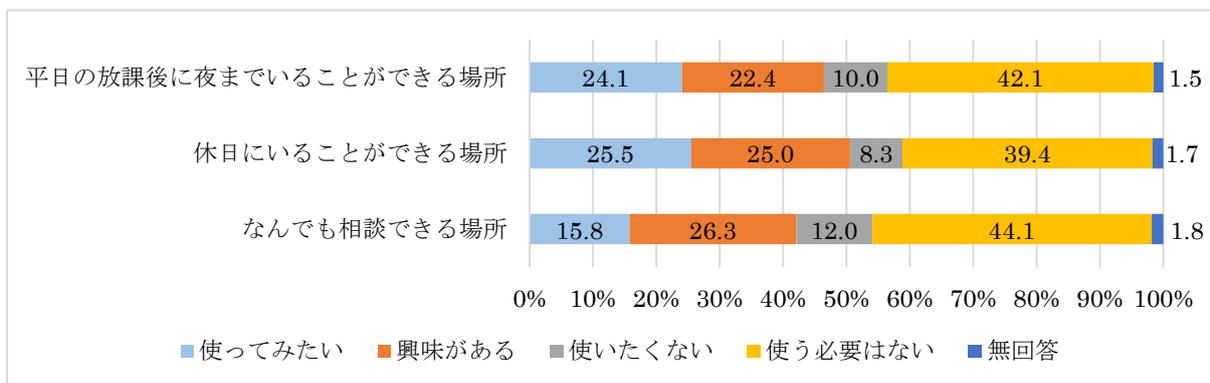
図表 6-3-2 居場所事業等の利用意向(小学 5 年生):生活困難度別



*有意な結果のみ作表。

中学 2 年生については、24.1%が「平日の放課後に夜までいることができる場所」を、25.5%が「休日にいることができる場所」を、15.8%が「なんでも相談できる場所」を「使ってみたい」と回答している。「平日の放課後」の居場所事業は、小学 5 年生よりも中学 2 年生にて利用意向を示した子どもの割合が高い。小学 5 年生と同様に、3つの事業の中では、「休日にいることができる場所」が最も多くの子どもが「使ってみたい」としている。

図表 6-3-3 居場所事業等の利用意向(中学 2 年生)

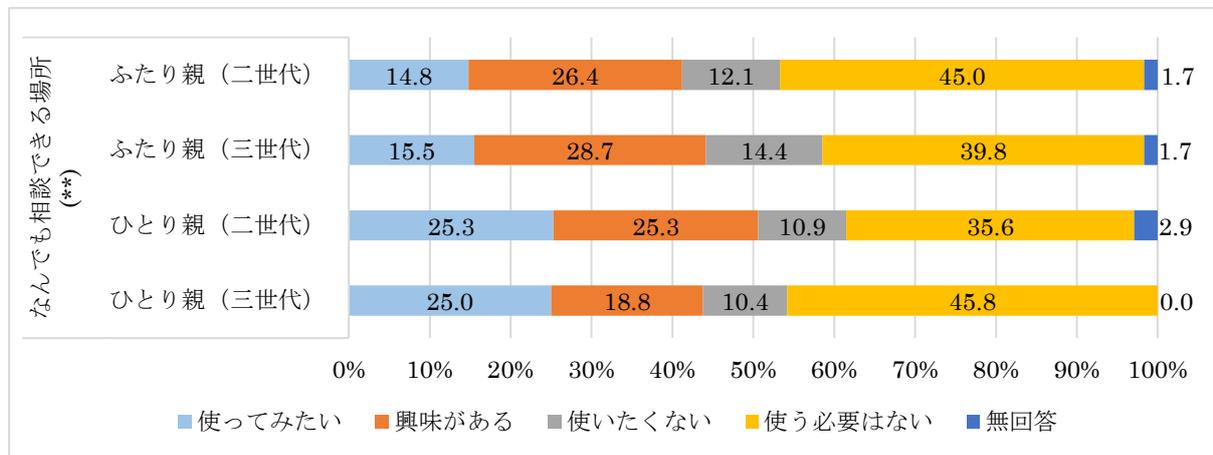


この割合を世帯タイプ別に見ると、「なんでも相談できる場所」にて統計的に有意な差が見られた。「なんでも相談できる場所」で「使ってみたい」と回答している割合はふたり親（二世帯）世帯で 14.8%、ふたり親（三世帯）世帯で 15.5%なのに対し、ひとり親（二世帯）世帯では 25.3%、ひとり親（三世帯）世帯では 25.0%となり、ひとり親世帯の方が高い傾向にある。

また生活困難度別に見ると、「平日の放課後に夜までいることができる場所」「休日にいることができる場所」の項目で統計的に有意な差が見られた。「平日の放課後に夜までいることができる場所」を「使ってみたい」と答えた割合は困窮層で 36.8%、周辺層 34.2%、一般層 22.6%と生活

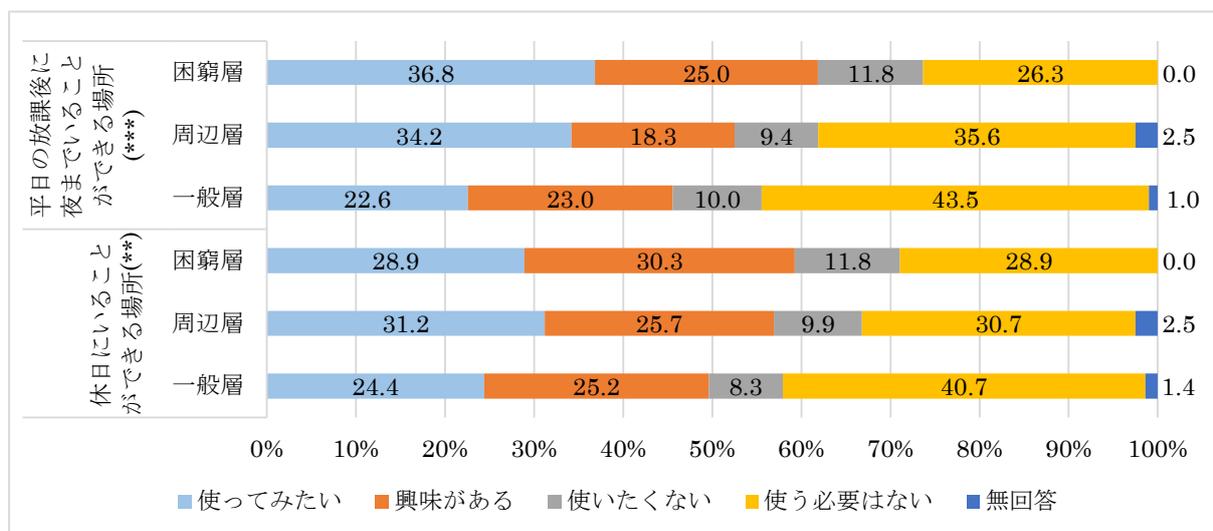
困難度が上がるにつれ利用意向も高まる。「休日にいることができる場所」を「使ってみたい」「興味がある」と答えた割合は困窮層で 59.2%、周辺層で 56.9%、一般層で 49.6%となり、生活困難度があがると利用意向も高くなる傾向が見られる。

図表 6-3-4 居場所事業の利用意向(中学 2 年生):世帯タイプ別



*有意な結果のみ作表。

図表 6-3-5 居場所事業の利用意向(中学 2 年生):生活困難度別



*有意な結果のみ作表。

4. まとめ

(1) 子どもの人間関係

子どもの人間関係では小学5年生、中学2年生ともに「学校の友だち」を仲のいい友だちとしてあげる割合が最も高いが(図表 6-1-1、図表 6-1-2)、他方で「とくに仲が良い友だちはいない」と回答する子どもも一定程度おり、小学5年生では困窮層の子ども(図表 6-1-3)、中学2年生ではひとり親(三世代)世帯の子どもにおいて、その他の子どもよりも高い割合となっている(図表 6-1-4)。学校における孤立は不登校等にもつながる可能性があるため、これらの子どもに配慮する必要がある。

最も会話をする相手については、小学5年生では家族なのに対し(図表 6-1-5)、中学2年生では友だちになっている(図表 6-1-6)。内訳を見ていくと小学5年生では「家族(親)」「家族(きょうだい)」「家族(おじいちゃん・おばあちゃんなど)」が世帯タイプ別に見た場合、統計的に有意となり、世帯構成の違いと家族との会話頻度に関連が見られた(図表 6-1-7)。特にひとり親(二世代)世帯はその他の層とくらべて家族との会話頻度が低い。

「スクールカウンセラー」や「学校の保健室の先生」は、学校における子どもの相談資源として有効であるが、実際にこれらの職種と会話をしている子どもは多くはない。しかし、小学5年生の「スクールカウンセラー」、中学2年生の「学校の保健室の先生」については、生活困難度別に見ると、困窮層の方がより話をする傾向が見られる(図表 6-1-9、図表 6-1-10)。一方で、小学5年生では「学校の保健室の先生」との会話頻度は、生活困難度が高いほど低い。

友人との関係については、小学5年生、中学2年生ともに一般層よりも周辺層、困窮層の方が友人から好かれていると考える割合が低くなる傾向が見られる(図表 6-1-12、図表 6-1-13)。家族に大切にされていると思うかについては中学2年生で世帯タイプ別、生活困難度別に見た場合、有意差があり(図表 6-1-15)、会話頻度とあわせると、ひとり親(三世代)世帯はその他の世帯タイプと比べて祖父母などの家族とよく話してはいるが、家族から大切にされているとは思っていないと考えられる。

(2) 子どもの平日・休日の過ごし方、居場所事業の利用意向

小学5年生の平日・休日の過ごし方では、最も過ごしている相手は「家族」、最も過ごす場所とほっとできる居場所は「自分の家」の割合が高い(図表 6-2-1、図表 6-2-4、図表 6-2-16、図表 6-2-20、図表 6-2-26、図表 6-2-28、図表 6-2-31、図表 6-2-33)。中学2年生も概ね同様の傾向だが、平日の放課後に関しては最も過ごしている場所は「部活動」、最も一緒に過ごす人は「学校の友だち」となっている(図表 6-2-1、6-2-7)。一方で、平日の放課後や平日の夜間に「一人である」割合は、小学5年生、中学2年生ともに、困窮層、ひとり親(二世代)世帯において高い(図表 6-2-2、図表 6-2-3、図表 6-2-18、図表 6-2-19)。平日の放課後に過ごす場所については、特に小学5年生では「塾や習い事」で週に1~2日以上過ごす子どもが7割を超える状況の中で(図表 6-2-4)、生活困難層やひとり親世帯の子どもは比較的これらの頻度が低く(図表 6-2-5、図表 6-2-6、図表 6-2-8、図表 6-2-23、図表 6-2-25)、代わりに小学5年生では公園(図表 6-2-6)、中学2年生では「友だちの家」(図表 6-2-9)で過ごす割合が比較的高くなっている。居場所事業の利用意向において、「平日の放課後に夜までいることができる場所」の利用意向は、小学5年生、中学2年生

ともに、「興味がある」まで含めると4割以上となっており、子どもの放課後と夜間の時間帯の孤立やネット依存の予防の観点からも、平日の放課後に夜までいることができる子どもの居場所は重要である（図表 6-3-1、図表 6-3-3）。

休日についても、中学2年生のひとり親（二世帯）世帯は「一人である」子どもの割合が高い傾向にある（図表 6-2-32）。居場所事業の利用意向においては、「休日にいることができる場所」は、小学5年生、中学2年生ともに利用意向を持つ子どもが、「興味がある」まで含めると5割を超えており（図表 6-3-1、図表 6-3-3）、休日の居場所事業はニーズがあると言える。

新 BOP への参加状況は世帯タイプも生活困難度も影響を与えていない。しかし新 BOP に参加しない理由では生活困難度別に見た場合、有意差があり（図表 6-2-14）、特に困窮層がほかの層よりも「知らない」と回答する割合が高く、困窮層への周知を強化していく必要性が示唆される。